令和 6 年度

事業報告

公益財団法人 国際交通安全学会
International Association of Traffic and Safety Sciences

令和６年度第14期(令和６年４月１日から令和７年３月31日まで)の事業活動について、次の通り報告いたします。

令和７年３月31日

公益財団法人 国際交通安全学会

会　　長　武 内 和 彦

目次

令和 6 年度事業活動の概況 …… 1
1. 事業目的 …… 2
2. 事業内容 …… 2
3. 展開にあたっての重点 …… 2
4. 令和 6 年度の特記すべき活動 …… 2
5. 主たる会議 …… 3
1)評議員会 …… 3
2)理事会 …… 3
3)創 50 戦略会議 …… 4
4)企画調整委員会 …… 6
5)創 50 事業企画推進委員会 …… 7
6)年次交流会 …… 7
6. その他 …… 8

国内外の「交通安全」にかかわる社会貢献事業 …… 11

Ⅰ 研究調査事業 …… 12
1. 令和 6 年度研究調査報告会 …… 12
2. 創 50 プロジェクト …… 13
＜2400R＞
国際共同研究展開プロジェクト …… 13
＜2400S＞
国際共同社会実装展開プロジェクト …… 15
3. 能登震災復興プロジェクト …… 17
4. 令和 6 年度研究調査プロジェクト …… 18
＜2401C＞(継続)
SDGs 達成に向けた健康資本増進による豊かな地域の創出 …… 19
＜2402C＞(継続)
自動運転車と共生する社会―その基盤整備に向けた包括的提言 …… 20
＜2403B＞(継続)
無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究 …… 23
＜2404A＞(新規)
気候変動に伴う交通事故リスクの長期変動に関する国際比較研究 …… 25

＜2405B＞（継続）
XR を活用した事故メカニズムの解明と安全対策～北日本地域での異常気象時を中心に～ …… 27
＜2406C＞（継続）
人工知能を用いた効率的な事故防止対策に関する研究 …… 29
＜2407C＞（継続）
カンボジアにおける交通安全行動変容プログラムの開発と実施 …… 31
＜2408B＞（継続）
協調的幸福感を高める交通社会の共生設計の試み―サステイナビリティから豊かさを備えたリジェネレーションへ …… 33
＜2409B＞（継続）
日本型ラウンドアバウトの普及加速に向けての調査研究 …… 35
＜2410B＞（継続）
子育てしやすく子どもにやさしい交通環境実現のための教育・行動変容プログラムの開発と適用 …… 38
＜2411B＞（継続）
ウエルビーイング向上のための二輪車のブランディング－二輪車死亡・重傷事故防止に向けた安全教育 …… 40
＜2412B＞（継続）
小型電動モビリティの受容性，安全性向上に向けた環境整備に関する国際比較研究 …… 43
＜2413A＞（新規）
セーフシステムアプローチを用いたタイにおける二輪車重大事故削減施策検討 …… 45
＜2414B＞（継続）
都市はウォーカブルになるべきなのか？　－データに基づく分野横断的議論－ …… 47
＜2420B 社会貢献＞
ウォーカブル・シティ評価手法の成果公表と実装 …… 49
＜2421B 社会貢献＞
中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動 …… 51
＜2422A 社会貢献＞
啓発動画を活用したアジア地域における健康起因事故防止の普及活動の展開 …… 53
＜2430 海外調査＞ …… 55
＜2470 国際発表＞ …… 57
5．令和 6 年度研究調査内部報告会 …… 58
6．研究調査部会企画委員会 …… 58

II 広報出版事業……60
1. 広報出版部会 学会誌編集委員会……60
2. 広報出版部会 英文論文集編集委員会……62

III 褒賞事業……67
1. 第 45 回(令和 5 年度)国際交通安全学会賞贈呈式……67
2. 第 46 回(令和 6 年度)国際交通安全学会賞……67
3. 令和 6 年度褒賞助成部会企画委員会……70
4. ユース活動助成金制度……71

IV IATSS フォーラム事業……73
1. IATSS フォーラム研修実施……73
2. 新研修コンテンツ導入……73
3. IATSS フォーラム部会 IATSS フォーラム実行委員会……73

V 国際交流事業……76
1. 国際フォーラム実行委員会……76
2. ATRANS(Asian Transportation Research Society)への業務委託……77
3. ESRA(E-Survey of Road users' Attitudes)3 プロジェクトへの参画……79
4. 海外研究機関等とのネットワークの強化……80
5. 第 12 回国際自転車安全会議(International Cycling Safety Conference : ICSC)の主催……81

財務諸表……83
1. 貸借対照表……85
2. 正味財産増減計算書……86
3. 正味財産増減計算書内訳表……88
4. 財務諸表に対する注記……90
5. 財産目録……91
6. 付属明細書……92

監査報告書(別紙)

令和６年度事業活動の概況

1. 事業目的

「理想的な交通社会の実現に寄与する」

2. 事業内容

1)交通及びその安全に関する調査研究
2)交通及びその安全に関する研究会の開催
3)交通及びその安全に関する情報、資料及び文献の収集及び発行
4)交通及びその安全に関する調査研究、教育その他の活動に対する褒賞
5)諸外国における理想的な交通社会の実現に向けた研修
6)その他本会の目的を達成するために必要な事業

3. 展開にあたっての重点

1)学際性並びに国際性を特徴とした先見性及び実際性を目指す、活力ある事業運営
2)社会及び経済環境を直視した事業規模とし、予定される収入を基とする効率的かつ均衡のとれた事業運営の継続

4. 令和6年度の特記すべき活動

1)創立 50 周年記念式典の開催、及び関連事業の実施

IATSS の創立 50 周年に際して、令和 6 年 9 月 17 日に虎ノ門ヒルズフォーラムで、創立 50 周年記念式典を開催し、警察庁長官、内閣府大臣官房審議官、本田技研工業(株)副社長などのご来賓により、来場、オンライン含めて、合計 394 名の方にご出席頂いた。

この式典においては、回顧、感謝、賞賛、展望の 4 本柱のもと、第一部では、記念表彰、新しい助成事業の紹介、会長講演などが行われ、第二部においては、宇宙飛行士の毛利衛氏による、基調講演、また、元 NHK アナウンサー、野中ともよ氏をモデレーターとする、パネルディスカッションが行われた。

また、武内会長より、今後の 10 年間を見据えたビジョンである、IATSS VISION 2024 が発表され、重大交通事故、環境負荷、不健康といった負のファクターを克服し、モビリティ・サステナビリティ・ウェルビーイングを互いに呼応させ、ポジティブな循環を生み出す ということを今後の学会活動の基軸とし、活動していく事が宣言された。

その他の創立 50 周年事業として、創 50 戦略会議を中心に国際性の高い事業の充実に努めているところであるが、「第 10 回国際フォーラム(GIFTS, Global Interactive Forum on Traffic and Safety)」においては、「理想的な社会に向けた交通文化交通文化が支える持続可能な社会」をテーマとしたシンポジウムを開催し、10 年間の集大成として、「交通文化」の視点が交通社会の改善において重要であると確認し、次の 10 年に向けた議論の出発点、50 周年を迎えた IATSS ビジョン実現に向けた第一歩ともなった。

また、IATSS Review 学会誌と、IATSS RESEARCH の 50 周年特集号に加え、創立 50 周年の記念出版として、2014 年の 40 周年記念出版の「交通・安全学」をベースとした、より時宜にあった内容に改訂するとともに、学際性および国際性を重視した教科書となる、「未来を抱く交通・安

全学」を、一般販売として発刊した。
更に、IATSS として初めて、国際自転車安全会議、ICSC(International Cycling Safety Community)を、令和 6 年 11 月 5 日(火)～7 日(木)の期間、愛媛県今治市で開催し、21 の国・地域から、のべ 141 名に参加頂いた。

5. 主たる会議

1)評議員会

第 29 回評議員会(定時評議員会)(R06.06.11)

経団連会館 5 階 502 号室にて開催し、次の(1)項については承認され、(2)、(3)項については決議された。

(1) 令和 5 年度事業報告および決算承認の件
(2) 評議員選任の件
(3) 役員選任の件

第 30 回評議員会(臨時評議員会)(R07.03.12)

経団連会館 5 階 503 号室およびオンラインにて開催し、次の(1)項については承認され、(2)項について決議された。

(1) 令和 7 年度事業計画及び収支予算書承認の件
(2) 理事・監事及び評議員報酬規程など改定の決議の件

2)理事会

第 64 回理事会(通常理事会)(R06.05.15)

経団連会館 5 階ルビールームにて開催し、次の(1)項については承認され、(2)、(3)、(4)項については決議された。

(1) 令和 5 年度事業報告及び決算書類等の承認の件
(2) 第 29 回評議員会(定時評議員会)招集の決議の件
(3) 顧問委嘱の件
(4) 海外招待会員新任の件

第 65 回理事会(臨時理事会)(R06.06.11)

経団連会館 5 階 502 号室にて開催し、次の(1)項については選定され、(2)、(3)項については決議され、(4)項については報告された。

(1) 代表理事および業務執行理事選定の件
(2) 顧問委嘱の件
(3) 創 50IATSS ビジョンの件
(4) 創立 50 周年記念式典の件

第 66 回理事会(臨時理事会:みなし決議)(R07.02.27)

理事 11 名から電磁的方法による全員の同意が得られ、また監事からは異議有る旨の意思表示を得なかったので、以下提案を承認可決する旨の理事会の決議があったものと

みなされた。

(1) 第 30 回評議員会開催の件

(2) 第 46 回国際交通安全学会賞承認の件

第 67 回理事会(通常理事会)(R07.03.12)

経団連会館 5 階 503 号室およびオンラインにて開催し、次の(1)、(2)、(3)、(5)、(6)、(7)項について決議された。(4)項については承認され、(8)項については報告された。

(1) 特定費用準備資金保有に関する決議

(2) 小学校・中学校・高等学校等への助成対象先選考に関する決議

(3) 令和7年度 学会の組織・運営体制に関する決議
専門部会等設置規程、専門部会等運営規程などの規定改定の決議

(4) 令和 7 年度事業計画書及び収支予算書等の承認

(5) 新会員選任および会員再任承認の決議

(6) 顧問委嘱の決議の件

(7) 重要な使用人選任に関する決議

(8) 代表理事及び業務執行理事の自己の職務執行状況報告

3)創 50 戦略会議

「創 50 戦略会議」は、平成 27 年 3 月に「創 50 IATSS ビジョンに関する諮問委員会」より小口会長(平成 27 年当時)に最終答申された「基本方針」に基づき、中長期的観点から具体的施策を展開するため設置されたものである。令和 5 年度は下記の事項について審議し承認した。

(1)創 50 戦略会議開催実績

第 1 回会議(R06.06.06)

・第 10 回 GIFTS について、委員長から準備の状況が報告された。

・国際共同研究展開プロジェクトについて、プロジェクトリーダーから進捗が報告された。

・国際同社会実装展開プロジェクトについて、プロジェクトリーダーから進捗が報告された。

・創 50 事業企画推進全般について、委員長から進捗が報告された。また、クロスストラテジーについて、委員長より提案があった。

・「創 50 IATSS ビジョン」について、座長からビジョン検討ワーキンググループでの検討結果が報告され承認された。

・IRF との覚書の締結について事務局から進捗が報告された。

・国際自転車安全会議(ICSC, International Cycling Safety Conference)の進捗について、事務局から準備の状況が報告された。

第 2 回会議(R06.11.11)

・第 10 回 GIFTS について、委員長より準備の状況が報告された。

・国際同社会実装展開プロジェクトについて、プロジェクトリーダーから進捗が報告された。

・国際同社会実装展開プロジェクトについて、プロジェクトリーダーから進捗が報告された。

・創 50 事業企画推進全般の進捗について、委員長より報告された。

・創 50 以降の学会運営体制について事務局より提案がなされ、理事会に上申することと決

定した。

・来年度定年延長の対象となる会員 3 名の候補について審議が行われ、内 3 名（大口会員、加藤会員、森本会員）を定年延長候補者として理事会に上申することと決定した。

・海外名誉顧問の自薦者の状況について確認を行った。

・「創 50 戦略会議」会議体は、これをもって発展的解消となることを確認した。

(2)ビジョン検討ワーキンググループ（WG）の開催と実績

創立 50 周年式典に向けて、新たな IATSS ビジョンを発信するために、ワーキンググループを立ち上げ、そこで、今後の IATSS の方向性を検討し、提案することが決定された。

第 1 回 WG 検討会(R06.04.12)

・各メンバーが事前に検討した草案を持ち寄り、ビジョンの原案の検討を行い、以降の詰めはメールにて審議することとした。

・今後の進め方の検討が行われた。

(3)創 50 戦略会議メンバー(敬称略)

議長　中村　文彦　(IATSS 会員/東京大学大学院新領域創成科学研究科　特任教授)
副議長　中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)
武内　和彦　(IATSS 会長/(公財)地球環境戦略研究機関(IGES)　理事長、東京大学　特任教授)
河合　信之　(IATSS 専務理事)
橋居　賢治　(IATSS 常務理事)
岸井　隆幸　(IATSS 理事/（一財）計量計画研究所　代表理事)
久保田　尚　(IATSS 理事/埼玉大学大学院理工学研究科　名誉教授)
蓮花　一己　(IATSS 理事/帝塚山大学　名誉教授　客員教授)
一ノ瀬　友博 (IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授)
小川　和久　(IATSS 会員/東北工業大学総合教育センター　教授)
上條　俊介　(IATSS 会員/東京大学情報学環　准教授)
北村　友人　(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科　教授)
土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
中村　英樹　(IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科　教授)
二村　真理子 (IATSS 会員/東京女子大学現代教養学部国際社会学科　教授)
森本　章倫　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)
藤澤　一郎　(IATSS 事務局長)

(4)ビジョン検討ワーキンググループメンバー(敬称略)

議長　中村　文彦　(IATSS 会員/東京大学大学院新領域創成科学研究科　特任教授)
一ノ瀬　友博 (IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授)
高橋　正也　(IATSS 会員/（独）労働者健康安全機構　労働安全衛生総合研究所　センター長)
土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
吉田　長裕　(IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科　准教授)

4)企画調整委員会

(1)新会員紹介イベントの企画・開催

令和 6 年度の新会員 4 名を既存の関係者へ紹介し、活動の活性化を図るため、以下のイベントを企画/実施した。

IATSS 新会員デビュートーク概要

開催日 :令和 6 年 7 月 25 日
場所 :ハイブリッド開催
内容 :新会員からのプレゼンおよび質疑
新会員 :大木聖子 氏、小嶋文 氏、柴山多佳児 氏、中井宏 氏
参加者 :会場・リモート併せて 44 名
(新会員 4 名、役員・評議員 9 名、顧問 8 名、会員 23 名)

(2)令和 7 年度新会員候補者の選考

当委員会での議論の結果、新会員候補を 3 名選考し、会長に上申した。

(3)委員会開催実績

第 1 回委員会(R06.05.23)

・各部会委員会の令和 6 年度の年間計画、課題を共有した。
・令和 7 年度新会員候補の募集・選考方針を検討・決定した。
・令和 6 年度の新会員デビュートーク準備進捗を確認した。
・能登半島大震災を受け、IATSS としての対応を検討した結果、企画調整委員会委員長直轄のワーキングチームを編成し、始動することとなった。
・IATSS ホームページ上での会員名簿公開(氏名・所属・専門分野)について委員長から提案があり、検討の結果、全会員に意向確認の上で、同意を得られた方々の情報を掲載することとなった。

第 2 回委員会(R06.09.05)

・新会員デビュートークの実施報告がなされた。
・令和 7 年度新会員候補者リスト 38 名について討議し、第一次絞り込みは行わず、次回二次選考までに、各委員の手持ち 3 票として、3 名の候補者に事前投票することとした。
・各部会委員会の活動進捗状況を共有した。
・ホームページでの会員名簿公開に関する進捗状況が報告された。
・11 月 5 日～7 日に IATSS が主催する国際自転車安全会議(ICSC)の準備状況について情報共有された。
・能登震災プロジェクトの進捗について情報共有された。

第 3 回委員会(R06.11.25)

・各部会委員会の活動進捗状況を共有した。
・令和 7 年度新会員候補選考について、委員による事前投票の結果一覧に基づく検討の結果、2 名(最終的に、ホンダ枠の後任の会員 1 名を加えた 3 名)を最終候補として会長

に上申することとなった。
・今年度委員長及び来年度新委員長との顔合わせ、引継ぎを兼ねた第 4 回委員会の実施企画について検討された。

第 4 回委員会(R07.03.30)
・来年度 IATSS の新組織、運営体制について共有された。
・各部会委員会のミッション、今年度の活動と課題、次年度への引継ぎ事項が共有された。
・翌日の視察について情報共有された。

(4)企画調整委員会メンバー

委員長　中村　文彦　(IATSS 会員/東京大学大学院新領域創成科学研究科　特任教授)
一ノ瀬　友博 (IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授)
小川　和久　(IATSS 会員/東北工業大学総合教育センター　教授)
上條　俊介　(IATSS 会員/東京大学情報学環　准教授)
北村　友人　(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科　教授)
土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科教授)
中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)
二村　真理子 (IATSS 会員/東京女子大学現代教養学部国際社会学科　教授)

5)創 50 事業企画推進委員会

(1)委員会開催実績

第 1 回委員会 (R06.05.07)

八重洲サロンとリモートとのハイブリッドで開催され、下記事項が情報共有・議論された。
・各記念事業進捗共有
(記念式典、記念出版、ICSC、ユース褒賞(助成)等)
・記念式典での功労賞の対象者について
・記念式典のパネルディスカッションについて

(2)企画委員会メンバー(敬称略)

委員長　土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
委員　大口　敬　(IATSS 会員/東京大学生産技術研究所　教授)
篠原　一光　(IATSS 会員/大阪大学大学院人間科学研究科　教授)
小竹　元基　(IATSS 会員/東京科学大学工学院機械系　教授)
森本　章倫　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)
吉田　長裕　(IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科　准教授)
紀伊　雅敦　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)

6)年次交流会

目的:理事・監事・評議員と、各部会委員長との情報交換、交流
内容:各委員会より最新活動の報告＋意見交換会

年次交流会概要

開催日：令和７年１月 21 日（火） 17:00～19:00

場所　：経団連会館 5F 503・504

内容　：第一部 委員会活動報告会

第二部 意見交換会

参加者：役員、評議員、会員　22 名

6. その他

1)人事関連の登記事項

(1)理事

氏名	登記事項	登記日
安部 典明	３月 13 日理事辞任に伴う抹消登記	令和６年４月 ２日
加藤 稔	３月 13 日理事就任に伴う登記	令和６年４月 ２日

(2)監事

鈴木 雅文	６月 11 日監事辞任に伴う抹消登記	令和６年７月２日
森澤 治郎	６月 11 日監事就任に伴う登記	令和６年７月２日

*重任に伴う登記情報は記載しておりません

2)理事及び監事

(R07.03.31)

役　職〔勤務〕	氏　名(敬称略)	現職〔国家公務員出身者最終官職〕
会　長〔非常勤〕	武内 和彦	(公財)地球環境戦略研究機関(IGES)理事長 東京大学特任教授
副会長〔非常勤〕	加藤 稔	本田技研工業(株)執行役
専務理事〔常勤〕	河合 信之	本田技研工業(株)特別職 〔関東管区警察局長〕
常務理事〔常勤〕	橋居 賢治	本田技研工業(株)主幹
理　事〔非常勤〕	久保 公人	尚美学園大学名誉教授
	鎌原 俊二	日本文化大學学長 〔大阪府警察本部長〕

	岸井 隆幸	(一財)計量計画研究所代表理事 政策研究大学院大学客員教授
	久保田 尚	埼玉大学大学院理工学研究科 環境科学・社会基盤部門名誉教授
	深澤 淳志	(一社)関東地域づくり協会理事長 〔国土交通省道路局長〕
	宮嵜 拓郎	救急ヘリ病院ネットワーク理事 (公社)自動車技術会フェロー 〔国土交通省自動車交通局技術安全部長〕
	蓮花 一己	帝塚山大学名誉教授 客員教授
監　事〔非常勤〕	森澤 治郎	本田技研工業(株)取締役常勤監査委員
	平田 久美子	税理士/平田久美子税理士事務所

3)評議員

(R07.03.31)

氏 名(敬称略)	現 職
鎌田 聡	(株)ジャパン・アイディー顧問
栗原 典善	OFFICE NORI, inc.代表
木場 宣行	(公財)日本自動車輸送技術協会会長
佐々木 真郎	(公財)交通事故総合分析センター理事長
友竹 明彦	(公財)三井住友海上福祉財団専務理事
林 良嗣	中部大学 卓越教授・学長付顧問 東海学園大学 卓越教授・特命学長顧問
宮田 年耕	(一財)道路新産業開発機構 理事長
安田 啓一	本田技研工業(株)執行職

4)主催・共催等

(1)主催

国際自転車安全会議 ICSC2024

開催日：令和 6 年 11 月 5 日（火）～7 日（木）

場所　：愛媛県今治市 今治国際ホテル

(2)共催

17th ATRANS Annual Conference

～“Transportation for Better Life : Managing Transport Decarbonization”～

開催日　：令和 6 年 8 月 30 日(金)

場所　　：Chatrium Grand Bangkok Hotel, Thailand

主催　　：ATRANS (Asian Transportation Research Society)、(公財)国際交通安全学会

(3)協賛

①令和 6 年春の全国交通安全運動

開催日：令和 6 年 4 月 6 日（土）～15 日（月）

主催　：内閣府・警察庁等 10 府省庁、都道府県、市区町村、関係 13 団体

②令和 6 年秋の全国交通安全運動

開催日：令和 6 年 9 月 21 日(土)～30 日(月)

主催　：内閣府・警察庁等 10 府省庁、都道府県、市区町村、関係 13 団体

③令和 6 年度 交通安全フォーラム － こどもと高齢者の交通事故防止

開催日：令和 6 年 9 月 5 日(木)

鹿児島県庁講堂

主催　：内閣府、鹿児島県

(4)後援

①2024 年 APRSO 年次総会

～Safe and sustainable Urban Transport

開催日：令和 6 年 10 月 7 日(月)～11 日(金)

場所　：ADB Institute（東京）

主催　：The Asia Pacific Road Safety Observatory (APRSO)

国内外の「交通安全」にかかわる社会貢献事業

Ⅰ 研究調査事業

1. 令和 5 年度研究調査報告会(R06.04.12)

参加者 :役員、評議員、顧問、会員、特別研究員、諸官庁、報道関係及び一般参加者 計 212 名
場所 :対面及びオンラインでのハイブリッド開催

報告テーマ :

2303A 無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究
2304C アジア地域における健康起因事故防止に関する国際比較研究
2306B 人工知能を用いた効率的な事故防止対策に関する研究
2321A 中山間エリアの高校通学における交通課題解決のための教育活動

2. 創 50 プロジェクト

＜2400R＞
国際共同研究展開プロジェクト

(1) 研究目的と概要

本プロジェクトは、世界各国における交通安全文化に関する地域的差異を客観的に認識し、体系的に理解することを目指した創 50 戦略研究プロジェクトの最終年度に位置づけられるものである。本年度は、交通安全文化の差異に基づく交通事故リスク因果構造の解明に向けて、世界 48 か国における ESRA2 データを、国際機関による公開統計データなどと組み合わせて用いた構造方程式モデルの改良を行った。交通安全文化と強い関係があると考えられる各国の気候条件を考慮することで、3E (Engineering、 Education、 Enforcement) と運転態度・行動、交通違反・交通事故経験に至るメカニズムを表現した。その結果、それらの構造がアフリカ諸国など発展段階にある“pre-motorization”、取締り・管理指向の強い“controlled safety”、成熟・自律的自動車社会である”self-disciplined”の 3 つの国・地域グループで大きく異なっていることを明らかにし、それぞれに対応した交通安全対策を提示した。また、公表データからは得られない、各国の交通安全に関わるデータ収集を目的とする country fact survey(CFS)の今後のあり方について取りまとめた。

令和 6 年 12 月 7 日に東京で開催された第 10 回 GIFTS においては、本プロジェクトが企画するパネルディスカッションセッション“International Perspective on Traffic Safety Culture”を実施し、上記の研究成果の公表とそれらに基づく討議を行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.14)
　プロジェクトの着地点の確認と年間計画の議論
　第 10 回 GIFTS のパネルディスカッションのシナリオ検討
　構造方程式モデル改良の方向性に関する議論
　CFS 計画に関する議論
　ESRA2 データを用いた利用交通手段に関する分析の報告と議論
・第 2 回研究会(R06.08.06)
　交通安全文化についての構造方程式モデリングに関する分析報告と議論
　CFS 計画に関する議論
　第 10 回 GIFTS のパネルディスカッションの準備について確認
　全体会議の準備について確認
・第 3 回研究会(R06.11.11)
　交通安全文化についての構造方程式モデリング最終版の報告と議論
　第 10 回 GIFTS のパネルディスカッションのシナリオ案の確認
　全体会議の企画確認
・全体会議(R06.12.05)
　これまでの研究成果の報告と議論
　第 10 回 GIFTS のパネルディスカッションのシナリオ確認
・第 10 回 GIFTS(R06.12.07)

本プロジェクトの成果を踏まえ、”International Perspective on Traffic Safety Culture”と題し、パネルディスカッションを実施。パネリストは以下の通り； 本プロジェクトより、中村英樹 PL(コーディネータ)、Wouter Van den Berghe 特別研究員、Ghassan Abu-Lebdeh 特別研究員、鳥海梓特別研究員、外部専門家として、Susanna Zammataro 氏(IRF)。

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 中村 英樹 (IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 教授)
井料 美帆 (IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 准教授)
塩見 康博 (IATSS 会員/立命館大学理工学部 教授)
鈴木 弘司 (IATSS 会員/名古屋工業大学社会工学科 教授)

特別研究員

井上 勇一 (IATSS 顧問)
鈴木 一史 (静岡理工科大学理工学部 准教授)
鳥海 梓 (東京大学生産技術研究所 特任准教授)
Ghassan Abu-Lebdeh (Associate Professor, Marshall University, USA)
Mohamed Shawky Ahmed (Associate Professor, Ain Shams University, Egypt)
Wael K. M. Alhajyaseen (Associate Professor, Qatar University, Qatar)
Nicola Christie (Professor, University College London, UK)
Nan Kang (Associate Professor, Nanjing Tech University, China)
Babak Mehran (Assistant Professor, Manitoba University, Canada)
Lorenzo Mussone (Associate Professor, Politecnico di Milano, Italy)
Keshuang Tang (Professor, Tongji University, China)
Wouter Van den Berghe (Director, Tilkon BV, Belgium)
Axel Wolfermann (Professor, Hochschule Darmstadt, University of Applied Sciences, Germany)

研究協力者

Xiaheyila Xukelaiti (名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程)

＜2400S＞
国際共同社会実装展開プロジェクト

(1) 研究目的と概要

令和元年から着手されたGRATS(Global Research Alliance on Traffic and Safety、2019-2021年)の活動の主たる目標は、交通文化観点で国際比較調査を実施するとともに、国内外の研究者や研究機関・国際機関と連携することにより、先進的な交通政策を討議・提案するための共通のプラットフォームを構築することであった。その成果として令和 3 年国際フォーラム(GIFTS)で示された「共有ビジョン」に基づき、その中の「指標」については学術レベルの取り組みとして ESRA(E-Survey of Road users' Attitudes)と連携しながら国際比較研究を継続実施していく役割として、令和 4 年度から「国際共同研究展開プロジェクト」が立ち上がった。また同時に「セーフシステム」については、実務レベルの取り組みとして社会実装を担う本プロジェクト「国際共同社会実装展開プロジェクト」が開始された。

本プロジェクトに於いて、社会実装を進める3つのアプローチとして、「1.情報連携」「2.評価」「3.教育」を設定した。「情報連携」については、まずは国際協力機構(JICA; Japan International Cooperation Agency)との連携を強化し、その取り組みに於いて一つの連携のモデルを構築し、他研究機関や国際機関へ連携拡大を狙うものとした。「評価」については、道路交通安全都市データベースの構築、「教育」については、IATSS フォーラム等との連携により、アジアを中心とする発展途上国の継続的な人材育成を目指すものとした。

令和6年10月7日から11日に開催されたAPRSO(Asia Pacific Road Safety Observatory)年次総会(東京)及びスタディツアー(宇都宮)においては、JICA と連携し、運営の後方支援、登壇者の推薦、ツアー訪問先の選定と調整など各種協力(後援)を行った。また、令和6年12月7日に東京で開催された第 10 回 GIFTS においては、本プロジェクトが企画するワークショップ"Connecting, Collecting and Communicating for a Safer Society"を実施し、上記のプロジェクト成果の公表とそれらに基づく討議を行った。

(2) 研究経過

・第1回研究会(R06.05.21)
　2024年APRSO年次総会(東京スタディーツアー)について(Mr. David Shelton/ADB)
　宇都宮LRTと街づくり(森本PL)
・第2回研究会(R06.07.29)
　APRSO年次総会・スタディツアー進捗(JICA・事務局)
　交通安全クラスター戦略(JICA)
　12月7日 第10回GIFTSワークショップの進め方(森本PL・事務局)
　交通安全都市データ活用の進捗報告(Lee Chun Hwee氏)
・第3回研究会(R06.10.29)
　APRSO年次総会・スタディツアー開催報告(JICA)
　12月7日 第10回GIFTSワークショップの進め方(森本PL・事務局)
・第4回研究会(R07.01.14)
　GIFTS2024の報告
　3ヵ年の成果とりまとめ(早稲田大学、IATSS、JICA)

都市別交通事故データベースと分析結果（早稲田大学・Lee Chun Hwee 氏）
その他（今後の協力体制など）

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 森本　章倫　　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)
北村　友人　　(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科　教授)
土井　健司　　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
吉田　長裕　　(IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科　准教授)

特別研究員

赤羽　弘和　　(IATSS 顧問/千葉工業大学創造工学部　教授)
福田　敦　　(IATSS 顧問/日本大学理工学部交通システム工学科　教授)
長田　哲平　　(宇都宮大学地域デザイン科学部　准教授)
北野　尚宏　　(早稲田大学理工学術院　教授)
小泉　幸弘　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）次長)　　令和 6 年 1 月退任
小柳　桂泉　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）参事役)　　令和 6 年 4 月退任
眞田　明子　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）次長)
須原　靖博　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）課長)
近藤　竜平　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）主任調査役)　　令和 6 年 12 月退任
吉田　綾　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）専門嘱託)　　令和 6 年 1 月退任
渡邉　すみれ　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）副調査役)　　令和 6 年 9 月退任
中村　香　　(独立行政法人　国際協力機構（JICA）専門嘱託)
橋津　慎　　(内閣府　交通安全企画調査担当専門職)
Lee Chun Hwee（早稲田大学理工学術院創造理工学部　修士課程 1 年）

3.＜2400T＞
能登震災復興プロジェクト

(1) 研究目的と概要

令和6年1月1日、「令和6年能登半島地震」が発生した。死者は260人・全壊家屋は8,424棟(6月4日時点)にのぼり、未だに山間地を結ぶ道路は各地で寸断されて、生活インフラやまちの復旧が急がれる状況にあり、IATSS 会員も個々に様々な復興支援活動を行っている。

IATSS は東日本大震災の際に学会横断のプロジェクトチームを組んで提言をまとめた経験がある。また過去に能登空港が学会賞（業績賞）を授賞した経緯もある。そこで今回の能登半島地震に対しても Mobility を軸にして提言を行う必要があると考え、企画調整委員会の委員長のもとで若手を含むメンバーで超学際的なプロジェクトを令和6年10月に立ち上げた。

本プロジェクトでは①復興に課題のある能登地域への提言、②半島地域・中山間地域での発災可能性を踏まえた他地域の事前復興への提言、を目的とし、他の学協会の動きも踏まえつつ超学際性を活かした IATSS 独自の提言を令和7年度中に完成すべく活動する。

令和6年度の主な活動としては、現地視察・ヒアリングで得た情報等を元に、メンバー間での情報の共有や議論を行い、提言作成に向けてのキーワードの抽出を行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.10.15)
　被災地である能登地域をよく知る専門家からの現状と課題についての情報共有
　IATSS 会員プロジェクトメンバーからの情報共有
・能登地域視察・自治体ヒアリング(R06.11.18)
　穴水町役場・輪島市役所へのヒアリングおよび現地視察を実施
・第 2 回研究会(R07.02.06)
　能登地域の視察結果共有
　各メンバーから個別の調査結果等の共有
　来期の進め方について議論

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 中村　文彦　(IATSS 会員/東京大学新領域創成科学研究科　特任教授)
　一ノ瀬　友博　(IATSS 会員/慶應義塾大学　環境情報学部　学部長・教授)
　大木　聖子　(IATSS 会員/慶応義塾大学　環境情報学部　准教授)
　柴山　多佳児　(IATSS 会員/ウィーン工科大学　交通研究所　上席研究員)
　中川　由賀　(IATSS 会員/中京大学　法学部　教授)
　中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学　経済学部　教授)
　平岡　敏洋　(IATSS 会員/(一財)日本自動車研究所主席研究員)
　森本　章倫　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)
特別研究員
　河合　信之　(IATSS 専務理事)
　髙山　純一　(公立小松大学大学院　サステイナブルシステム科学研究科　教授)
　塩士　圭介　(株式会社日本海コンサルタント 社会事業本部　計画研究室　本部長兼室長)
オブザーバー
　三林　直慶　(石川県企画振興部　交通総合対策監)

4. 令和 6 年度研究調査プロジェクト

令和 6 年度は、次の 18 件の研究調査プロジェクト等を実施した。

《自主研究》

2401C　SDGs 達成に向けた健康資本増進による豊かな地域の創出

2402C　自動運転車と共生する社会―その基盤整備に向けた包括的提言

2403B　無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究

2404A　気候変動に伴う交通事故リスクの長期変動に関する国際比較研究

2405B　XR を活用した事故メカニズムの解明と安全対策　～北日本地域での異常気象時を中心に～

2408B　協調的幸福感を高める交通社会の共生設計の試み―サステイナビリティから豊かさを備えたリジェネレーションへ

2410B　子育てしやすく子どもにやさしい交通環境実現のための教育・行動変容プログラムの開発と適用

2412B　小型電動モビリティの受容性，安全性向上に向けた環境整備に関する国際比較研究

2413A　セーフシステムアプローチを用いたタイにおける二輪車重大事故削減施策検討

2414B　都市はウォーカブルになるべきなのか？　－データに基づく分野横断的議論－

《IATSS フォーラム連携》

2407C　カンボジアにおける交通安全行動変容プログラムの開発と実施

《行政・団体連携》

2406C　人工知能を用いた効率的な事故防止対策に関する研究

2409B　日本型ラウンドアバウトの普及加速に向けての調査研究

2411B　ウエルビーイング向上のための二輪車のブランディング－二輪車死亡・重傷事故防止に向けた安全教育

《社会貢献》

2420B　ウォーカブル・シティ評価手法の成果公表と実装

2421B　中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動

2422A　啓発動画を活用したアジア地域における健康起因事故防止の普及活動の展開

《海外調査》

2430　「未来の都市の交通及び安全に係る取り組みの調査研究」

＜2401C＞
SDGs 達成に向けた健康資本増進による豊かな地域の創出

(1)研究目的と概要

日本では人口減による地域の疲弊は、特に都市部よりも地方において顕著な社会課題となっている。本提案の別府市等の温泉地は、人口減、観光客の減少による地域経済の疲弊が起こっている。本プロジェクトでは、地域資源の科学的根拠を実証し、適切に活用することで、地域や来訪者の健康を増進し、地域の活性化と人的資本の増進を推進することを目的とする。別府市はもとより、他の温泉地域も含めて行政と連携して、温泉地（自然資本）を活用して、健康（健康資本）に資する交通・まちづくりの在り方と地域ごとの取り組みを進める。

2 年目までに温泉資源の科学的根拠を実証した（テーマ A）。今年度は、温泉地のオンデマンドバスに関するコンジョイント分析に加え、温泉地である別府と熱海の観光地における周遊のネットワーク分析やウォーカブルに関する分析を行い、温泉地のまちづくりに関する研究（テーマ B）を進めてきた。

(A) 分析結果は、オンデマンドバスの選択には、温泉に行きやすくなること、および田舎であること（地域ベネフィット）が重要であった。

(B) 別府と熱海温泉の観光地における交通ネットワークを可視化し、観光地の中心性を算出した。結果、それぞれの観光地における交通の動きをとらえることができた。「新湯治・ウェルネスツーリズム」事業 拠点施設（扇山地区）決定し、今後含めて地域貢献につなげる。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.06.13)
　Web アンケートの進捗について情報共有
　今年度の計画について議論

・長崎県雲仙市にて打合せ・現地視察(R06.08.26)
　雲仙市長との議論
　温泉地の視察と温泉街の活性化に関するヒアリング

・第 2 回研究会(R07.02.18)
　3 年間のまとめについて議論
　来年度のプロジェクト提案について議論

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 馬奈木　俊介　(IATSS 会員/九州大学大学院工学研究院　教授)
　一ノ瀬　友博　(IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授)
　土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科教授)
　森本　章倫　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)

特別研究員
　中村　寛樹　(久留米大学基盤教育研究センター　教授)
　武田　美都里　(九州大学都市研究センター　特任助教)
　溝田　勉　(IATSS 顧問/長崎大学　名誉教授)
　米田　誠司　(國學院大學観光まちづくり学部　教授)
　玉置　哲也　(香川大学創造工学部　准教授)

＜2402C＞

自動運転車と共生する社会 ―その基盤整備に向けた包括的提言―

(1) 研究目的と概要

自動運転車の社会実装が迫り、自動運転車に対する期待が高まる中、喫緊の課題を確認し、その解決を目指す。第一に、自動運転車の公道での利用を可能にした法制度を確認する。令和4年改正道交法は、レベル4の技術利用を許可する制度を導入した。これは国際的にも最先端と評価できる制度であり、令和5年4月の施行を前にして、同制度を正確に理解する。第二に、同改正法の射程を確認し、より広い場面でレベル4の実用化を目指す。そのために、第三として、自動運転車の利用に向けた先進的取り組みを確認し、今後の課題を抽出しガイドラインを作成する。

3年間の研究の振り返りとして、2022年改正道交法が導入した特定自動運行制度を理解し、関連する外国法制(ドイツ、イギリス、スイス)を踏まえた検討を行い、自動運転車に係る事故時の責任分担、そしてジレンマ状況(トロリー問題)や国際シンポジウムを踏まえガイドラインを作成する。

そのガイドラインの中で、事故が起きた場合の関係者の刑事責任のあり方を議論し、ドイツ倫理委員会のルールを模倣したガイドラインの内部矛盾を確認した。義務論におけるジレンマ状況に直面した自動運転車、誰かを犠牲にして誰かを救助することを一切否定した。運を天に任せる他方で、多数を保護するため、少数の生命侵害を許容など、矛盾箇所を整理した。また、個人の尊厳などより多くの人命救助に至る自動運転車の挙動が必要と考え、緊急避難の原理によりプログラマ、メーカに犯罪不成立と整理。緊急避難が成立しない場合プログラマやメーカが被害を最少に止めるべく可能な限り努力をしていれば、故意、過失が否定され犯罪不成立。個別の事案の証拠に応じた判断(農水省の取り組みをも参照)した。

緊急避難の前提問題としてリスクテイクをした結果、ジレンマ状況に直面した者は、どの程度保護されるべきか。また、自動運転車に衝突するリスクをテイクして道路に立ち入った人より、事故遭遇確率の低い歩道を歩いていた人がより保護されるべきは。そして、自動運転車の乗員を他の関与者より保護すべきか。など、ISO に沿って自動運転車を作成すれば、事故が生じてもプログラマ、メーカは免責されるのか、ISO の基準は合理的か、などについて議論した。

(2) 研究経過

・第1回研究会(R6.04.24)

内部報告会アンケートを参考にして、昨年度の振り返り

2024年3月の海外調査(UK)を報告

今年度の研究計画について

・国内調査_永平寺町・京阪バス (R06.08.1-2)

自動運転に関する情報交換と視察を行い事故状況について議論

・第2回研究会(R6.09.24)

7月 IATSS サロン視察報告

8月永平寺町・京阪バス視察報告

上記を踏まえた助言・ガイドラインの議論

・海外調査_スイス・ドイツ・フランス（R06.10.30-11.2）
チューリッヒ大学、ケルン大学、バーゼル大学と打合せを行いおうしゅうにおける法的観点で議論
Urbanloop 自動運転実証実験を視察

・第3回研究会(R6.10.17)
自動運転車に対する取組について_電動モビリティシステム専門職大学、農林水産省

・第4回研究会(R6.11.26)
2024 年 10 月の海外調査(欧州)を報告
公表するガイドライン、国際シンポジウム実施、北海道内のスマート農業の状況について

・国際シンポジウム(R7.01.20)
ドイツ・スイス・日本のレベル4を実現するための法的、社会的課題について議論
パネルディスカッション

・第5回研究会(R7.02.07)
国際シンポジウムの振り返り
3年間の研究の振り返り
東京パラリンピック自動運転車関係事故の調査報告（再読）
内部報告会の準備内部報告会案についての意見交換

・国内調査_北海道庁、札幌地裁（R07.03.24-26）
北海道庁副知事および札幌地裁所長との意見交換を行い法的観点で議論

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 今井　猛嘉　（IATSS 会員/法政大学　法科大学院　教授　弁護士）
岩貞　るみこ　（IATSS 会員/モーター・ジャーナリスト）
大口　敬　（IATSS 会員/東京大学 生産技術研究所　教授）
小川　和久　（IATSS 会員/東北工業大学　総合教育センター　教授）
上條　俊介　（IATSS 会員/東京大学情報学環　准教授）
木林　和彦　（IATSS 会員/東京女子医科大学医学部法医学講座　教授）
篠原　一光　（IATSS 会員/大阪大学大学院　人間科学研究科　教授）
杉本　洋一　（IATSS 会員/株式会社本田技術研究所先進技術研究所　フェロー）
菅沼　直樹　（IATSS 会員/金沢大学　高度モビリティ研究所　副所長・教授）
中尾田　隆　（IATSS 会員/池袋南法律事務所　弁護士）
中村　彰宏　（IATSS 会員/中央大学　経済学部　教授）
平岡　敏洋　（IATSS 会員/（一財)日本自動車研究所　主席研究員）
森本　章倫　（IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授）
吉田　長裕　（IATSS 会員/大阪公立大学　大学院工学研究科　准教授）

特別研究員

宮嵜　拓郎　　（IATSS　理事/救急ヘリ病院ネットワーク　理事）
鶴賀　孝廣　　（IATSS　顧問）
松村　良之　　（IATSS　顧問/北海道大学　名誉教授）
矢野　雅文　　（IATSS　顧問/東北工業大学　客員研究員）
石附　弘　　（IATSS　顧問/日本市民安全学会　会長）
古川　修　　（IATSS　顧問/電動モビリティシステム専門職大学　教授　学長上席補佐）
結城　雅樹　　（北海道大学　大学院文学研究院　教授）
長谷川　晃　　（北海道大学　大学院法学研究科　名誉教授）
大澤　彩　　（法政大学　法学部　教授）
LEBRETON Caroline （法政大学　大学院　法律研究科　および　通信教育学部　兼任講師）
清水　和夫　　（モーター・ジャーナリスト）
佐藤　昌之　　（ITS　Japan　法務主査）
小川　貴裕　　（弁護士法人　アディーレ法律事務所　弁護士）
宮木　由貴子　（(株)第一生命経済研究所　取締役　主席研究員）
膳場　百合子　（早稲田大学　理工学術院　教授）
阪井　光平　　（弁護士法人　カイロス総合法律事務所　弁護士）
波多野　邦道　（本田技研工業株式会社　エグゼクティブチーフエンジニア）
高山　寧　　（野村不動産ホールディングス株式会社　取締役（監査等委員））
佐藤　秀貴　　（東京臨海病院　救急科　部長　医師）
小田　有哉　　（国立極地研究所　南極観測センター　医師）
本村　友一　　（日本医科大学　千葉北総病院　救急救命センター　講師　医師）
藤山　拓　　(University College London Assoc. Prof. Dr.)

オブザーバー

多田　義隆　　（国土交通省　自動車局　自動運転戦略室　室長）
成富　則宏　　（警察庁　交通局　交通企画課　自動運転戦略室　室長）
山田　樹　　（警察庁　交通局　交通企画課　自動運転戦略室　課長補佐）
保坂　和人　　（最高検察庁　検事）
加藤　和輝　　（法務省　刑事局　参事官）
一木　光太郎　（法務省　刑事局　付）
日野　香里　　（北海道　経済部　産業振興局　産業振興課　課長補佐）
高井　雅木　　（国土交通省　大臣官房官庁営繕部　整備課　特別整備室　企画専門官）
福永　茂和　　（経済産業省　製造産業局　ITS・自動走行推進室　室長）

＜2403B＞
無信号横断歩道における車両の譲りを促すための実証的研究

(1) 研究目的と概要

持続的な交通管理の課題として、信号機の維持管理の問題が挙げられており、信号機によらない歩行者横断歩道の運用が増加してく可能性がある。一方で、無信号横断歩道での一時停止率の低さも指摘されており、その対策が求められている。海外では閃光により運転者の注意喚起を促す Rectangular Rapid Flashing Beacons (RRFB)を横断歩道の施設対策として整備し、横断歩行者の通行利便性を向上させようとする取り組みがある。そこで、本研究では、海外における無信号横断歩道の設置方法や車両の一時停止を促すための対策方法の整理を行ったうえで、日本の無信号横断歩道において閃光型の注意喚起施設の導入可能性を検討する。

初年度(2023 年度)は、海外における注意喚起施設の導入調査/わが国における社会実験箇所の検討および関係者との調整/無信号横断歩道における交通実態調査(事前調査)を行った。本年度(2024 年度)は、無信号横断歩道における注意喚起施設の設置の社会実験/導入効果の把握のための交通実態調査(事後調査の実施)を行った。

今後の展開としては、千葉県内の設置個所におけるモニタリング調査ならびに認知度の向上効果の検証や複数個所の導入効果の把握、そして無信号横断歩道における車両の譲りを促す施設の設置方法の提案を行う。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.06.05)
　昨年度の振り返り(実施内容、RRFB カナダの事例、外部報告会アンケート結果)
　今年度の研究計画について(実施予定、交通実態調査、社会実験実施)
　横断歩道の白線間隔の情報共有

・第 2 回研究会(R07.01.15)
　前回の研究会の振り返り
　RRFB の社会実験の実施状況および事前調査の結果について
　豊田市での調査について

・第 3 回研究会(R07.02.20)
　前回の研究会の振り返り
　RRFB の社会実験の実施状況について
　豊田市での調査について
　内部報告会について

・国内調査(R07.02.26-28)
　豊田市 RRFB における交通量調査を実施し比較データを収集

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 小早川　悟　　(IATSS 会員/日本大学理工学部　交通システム工学科　教授)
　関根　太郎　　(IATSS 会員/日本大学理工学部　機械工学科　教授)
　平岡　敏洋　　(IATSS 会員/ (一財)日本自動車研究所　主席研究員)
　松橋　啓介　　(IATSS 会員/ (国研)国立環境研究所　社会システム領域　室長)

田久保　宣晃　(IATSS 会員/ (公財)交通事故総合分析センター　研究部次長兼研究第一課長)

特別研究員

高田　邦道　　(IATSS 顧問/日本大学 名誉教授)

福田　敦　　(IATSS 顧問/日本大学理工学部　交通システム工学科 教授)

松村　みち子　(IATSS 顧問/タウンクリエイター　代表)

大谷　亮　　((一財) 日本自動車研究所 主任研究員)

菊池　浩紀　　(日本大学理工学部　交通システム工学科 助教)

青山　恵里　　(日本大学理工学部　交通システム工学科 助教)

吉村　暢洋　　(日本大学大学院理工学研究科 社会人院生)

＜2404A＞

気候変動に伴う交通事故リスクの長期変動に関する国際比較研究

(1) 研究目的と概要

気候変動の影響は必ずしも激甚災害だけでなく、日々の気象条件にも変化を及ぼす。そのため、我々の日常生活も、それに適応することが求められる。一方、気候は人々の生活・交通行動だけでなく、リスク認知・判断にも大きな影響を及ぼすことが知られている。その場合、気候変動は長期的な交通事故特性にも影響を与えると考えられるが、それに関する知見は少ない。本プロジェクトでは、交通行動に関する国際比較アンケートや各種観測データを用い、気象条件と交通事故の根源的な関係性を明らかとする。それに基づき、長期の気候変動シナリオにおける、世界的な事故リスクの変動について考察を行うとともに、今後の都市・交通政策のあり方を提言する。

本プロジェクトでは以下の課題に取り組んでいる。

① 気象条件による交通行動への影響に関する研究

② 気象条件が運転行動・交通事故件数に及ぼす影響の分析

③ 各種要因を考慮した世界の交通死亡者数変動に関するモデル分析

①に関して、今年度はアンケート設計を行い、先行的に日本・ベトナムでアンケートを実施した。次年度以降に北米・アジア・中東・欧州にも展開する予定である。

②については、交通事故データ、携帯電話基地局データ、公開ライブカメラ動画を用い、気象条件が交通事故・交通行動・運転行動に及ぼす影響を定量評価した。次年度以降はより詳細な運転行動の取得・分析を試みる。

③については、今年度は利用可能なデータの精査を行い、基礎的な分析を行った。次年度以降で交通事故死亡者数推計モデルの構築に取り組む。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.13)

プロジェクトの趣旨、今年度の年間計画と取り組み内容の説明、および意見交換

・第 1 回国際合同研究会(R06.05.29)

海外メンバーに向けたプロジェクト趣旨、年間計画と取り組み内容の説明、及び意見交換

・アンケート調査の骨子検討/分科会（R06.06.12）

気候条件と交通行動に関するアンケート調査の具体的なアンケート項目、及び実施方法と分担についての打ち合わせ

・ベトナム出張/調査打ち合わせ、現地交通状況視察（R06.08.30-09.04）

ベトナムにおけるアンケート調査実施協力要請、調査概要打ち合わせ、及び現地交通状況の視察

・第 2 回研究会(R06.09.18)

アンケート調査項目素案の検討

3 つのリサーチクエスチョンに沿った、メンバーからの調査報告・話題提供

RQ1 「気象条件に伴う交通行動への影響の国際比較」

RQ2 「気象条件が運転行動に及ぼす影響分析」

RQ3 「気象条件を考慮した事故発生状況の分析」

・第 2 回国際合同研究会(R06.10.09)

海外メンバーとのアンケート調査項目素案の検討

・国際ワークショップ開催(R06.11.01)

①来年度の質問紙調査に関する検討と議論

②プロジェクトメンバーからの話題提供

長谷川教授 :“Climate change and mitigation in transport and food systems”

Yusak 教授 :“How we have measured impacts of weather and climate change to travel behaviour”

上村氏 :“Impact of weather conditions on traffic behavior”

塩見 PL :“Analysis of the impact of weather conditions on driving behavior”

・アンケートプレ調査実施(R06.12.05-11)

日本、ベトナムにおけるアンケートプレ調査を実施

・第 3 回研究会(R07.02.19)

3 つのリサーチクエスチョンに沿ったメンバーからの調査報告(最終)

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 塩見 康博 (IATSS 会員/立命館大学理工学部 教授)

大森 宣暁 (IATSS 会員/宇都宮大学地域デザイン科学部 教授)

紀伊 雅敦 (IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科 教授)

中井 宏 (IATSS 会員/大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)

中村 英樹 (IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 教授)

松橋 啓介 (IATSS 会員/ (国研)国立環境研究所社会システム領域 室長)

特別研究員(日本)

嶋本 寛 (宮崎大学工学部工学科 准教授)

鳥海 梓 (東京大学生産技術研究所 特任准教授)

西内 裕晶 (高知工科大学システム工学群 教授)

長谷川 知子 (立命館大学総合科学技術研究機構 教授)

An Minh Ngoc (立命館大学交通マネジメント工学研究室 客員准教授)

特別研究員(海外)

Nur S. A. Sukor (Associate Professor, University of Science, Malaysia)

Yilin Sun (Associate Professor, Zhejiang University, China)

Wael Alhajyaseen (Associate Professor, Qatar University, Qatar)

Yusak O. Susilo (Professor, University of Natural Resources and Life Sciences, Austria)

Ari K. M. Tarigan (Associate Professor, University of Stavanger, Norway)

Owen Waygood (Professor, Polytechnique Montreal, Canada)

Nicolas Saunier (Professor, Polytechnique Montreal, Canada)

研究協力者

石間伏 皓瑛 (大阪大学環境エネルギー工学科 4 年)

伊藤 朗 (立命館大学理工学部環境都市工学科 4 年)

奥井 涼太 (立命館大学大学院 博士前期課程 1 年)

上村 弥来 (高知工科大学システム工学群 4 年)

藤園 翔太 (立命館大学理工学部環境都市工学科 4 年)

米野 航 (立命館大学大学院 博士前期課程 1 年)

＜2405B＞

XR を活用した事故メカニズムの解明と安全対策
～北日本地域での異常気象時を中心に～

(1) 研究目的と概要

XR は現実社会と仮想世界を融合させる技術の総称であり、交通研究でも急速に活用されてきた。本研究では、視界不良など通常の手法では再現性が困難な交通状況を取り上げ、XR による実験およびその分析を通じて、具体的な対策提言を目的とする。

令和 5 年度は、①冬期の視界不良となる高速道路、および②沿道の堆雪により視界不良となる都市内の一般道を対象とした XR 実験、さらに③外国人レンタカードライバーを対象とした VR 習熟運転を実施した。これら研究の結果、①からは、HUD による支援はその情報量により効果が異なること、②からは情報提示としての AR 表示はメータークラスターと比べて効果が期待できること、③からは、日本の交通環境に慣れるための方策としての有効性を確認できたことを明らかにした。

令和 6 年度はこれら成果をふまえ、運転者支援のための望ましい HMI を明らかにするとともに、提案手法の国際展開に向けた検討などを行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.06.03)
　今年度プロジェクトの進め方について・質疑
　VR 実験計画説明・議論
　外国人ドライバーを対象とした VR 実験の説明・議論
　本プロジェクトの海外展開について
・外国人ドライバーを対象とした VR 習熟運転状況の視察と議論＠札幌ポプラ店(R06.07.01)
・第 2 回研究会(R06.10.10)
　近畿大学予備実験結果総括
　本実験に向けての実験内容の議論
・第 3 回研究会(R06.12.24)
　北海道大学本実験に向けての実験内容の議論
・外国人ドライバーを対象とした VR 習熟運転状況の視察＠札幌ポプラ店(R07.02.14)
・第 4 回研究会(R07.02.15)
　外国人ドライバーVR 習熟視察結果の報告・議論
　北海道大学 VR 本実験結果の報告・議論
　内部報告会への資料内容と作成計画共有
　来年度提案に向けて議論

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 浜岡　秀勝　　(IATSS 会員/秋田大学大学院理工学研究科　教授)
　神田　直弥　　(IATSS 会員/東北公益文科大学学長・教授)
　平岡　敏洋　　(IATSS 会員/(一財)日本自動車研究所主席研究員)

特別研究員

蓮花　一己　（IATSS 理事/帝塚山大学　名誉教授　客員教授）
石附　弘　（IATSS　顧問/日本市民安全学会　会長）
萩原　亨　（北海道大学　名誉教授）
飯田　克弘　（大阪大学大学院工学研究科　准教授）
森泉　慎吾　（帝塚山大学心理学部心理学科　准教授）
多田　昌裕　（近畿大学情報学部情報学科　准教授）
高橋　翔　（北海道大学大学院工学研究院　准教授）
八木　雅大　（北海道大学大学院工学研究院　特任助教）
二宮　芳樹　（名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所　特任教授）
邢　健　（高速道路総合技術研究所交通環境研究部　交通研究担当部長）
萩田　賢司　（科学警察研究所交通科学部交通科学第一研究室　主任研究官）
洪性敏　（(財団法人) 華城市研究院　都市環境研究室　研究委員）
佐藤　久長　（中日本ハイウェイ・エンジニアリング名古屋㈱名古屋支店　交通技術部長）
鈴木　雄　（北海学園大学工学部　社会環境工学科　准教授）
福井　千菜美　（北海道大学大学院工学研究院　博士後期課程）
森本　貴大　（近畿大学大学院総合理工学研究科　博士前期課程）

＜2406C＞
≪行政・団体連携≫
人工知能を用いた効率的な事故防止対策に関する研究

(1) 研究目的と概要

これまで交通取締りは長年の経験をもとに、現場で効率的な取り締まり計画をたてていた。平成 23 年からは交通取締り計画が PDCA に組み込まれ、事故実態や分析結果を反映した計画立案がなれているが、都道府県単位でシステムが異なり、担当者の技術力に依存することが大きい。第 11 次交通安全基本計画では、地理的情報等に基づき交通事故分析の高度化を図り、交通事故抑止に資する交通指導取締りを推進することを重点施策としている。また、令和 3 年にデジタル庁が創設され、行政のデジタル化の積極的な推進が急務となっており、交通安全分野においても標準化などの対応が必要となっている。

国際交通安全学会では平成 26 年から「交通取締りハンドブック」を発行し、交通取締りに関わる関係者への継続的な情報提供を実施してきた。交通行政の現場からもビックデータを活用した効率化が求められている。また、人工知能を用いた交通事故リスクの予測については国内外で研究事例はあるが、それを用いて実際に取締り計画を立案している地域は見られない。特に実施した取締りの効果を明示的にモデルに組み込み、汎用的なモデルを開発した事例はない。

このような背景を受け、令和 4 年度に人工知能 AI を活用した効率的な事故抑止対策箇所を提案するモデルを構築し、令和 5 年度は基礎的なモデルの実地検証を行った。令和 6 年度は 2 か年の研究成果を取りまとめ、社会実装にむけた検討と交通取締りハンドブックの改訂を実施した。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.28)
　令和 5 年度研究概要の報告・質疑
　令和 6 年度研究プロジェクトの説明・議論
　交通取締りハンドブックの更新作業分担の説明
　令和 5 年度研究成果の学会発表の説明

・京都府警ヒアリング(R06.09.13)
　取締り活動、街頭活動の実施状況/科学的な取締り活動の実施判断/日常的な取締り及び街頭活動場所の変化等/街頭活動支援システム(IATSS で開発済み)の活用可能性

・第 2 回研究会(R06.09.13)
　京都府警ヒアリング調査結果の報告・質疑
　交通取締りハンドブック改訂作業　役割分担と日程の説明
　今後の研究会日程について

・神奈川県警ヒアリング(R06.09.20)
　取締り活動、街頭活動の実施状況/科学的な取締り活動の実施判断/日常的な取締り及び街頭活動場所の変化等/街頭活動支援システム(IATSS で開発済み)の活用可能性

・沖縄県警ヒアリング(R06.12.13)
　取締り活動、街頭活動の実施状況/科学的な取締り活動の実施判断/日常的な取締り及び街頭活動場所の変化等/街頭活動支援システム(IATSS で開発済み)の活用可能性

・三重県警ヒアリング(R07.01.10)

取締り活動、街頭活動の実施状況/科学的な取締り活動の実施判断/日常的な取締り及び街頭活動場所の変化等/街頭活動支援システム(IATSS で開発済み)の活用可能性

・第 3 回研究会(R07.01.10)

三重県警ヒアリング調査結果の報告・質疑

市販プローブデータの活用可能性検討結果報告・議論

交通取締りハンドブック改訂作業状況の報告・質疑

・第 4 回研究会(R07.02.19)

研究状況の報告・質疑

内部報告会について

今後について

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 森本　章倫　(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科　教授)

岩貞　るみこ　(IATSS 会員/モータージャーナリスト)

加藤　一誠　(IATSS 会員/慶應義塾大学商学部　教授)

中川　由賀　(IATSS 会員/中京大学法学部　教授)

中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)

浜岡　秀勝　(IATSS 会員/秋田大学大学院理工学研究科　教授)

田久保　宣晃　(IATSS 会員/ (公財)交通事故総合分析センター　研究部次長兼研究第一課長)

特別研究員

古川　修　(IATSS　顧問/電動モビリティシステム専門職大学　教授　学長上席補佐)

神谷　大介　(琉球大学工学部工学科社会基盤デザインコース　准教授)

眞中　今日子　(流通経済大学経済学部　准教授)

栗原　豊季　(早稲田大学大学院　修士 1 年)

寺奥　淳　(株式会社建設技術研究所中部支社道路・交通部)

オブザーバー

古泉　貴志　(警察庁交通局交通指導課　課長補佐)

増田　克紀　(警視庁交通部交通総務課　課長代理)

渡邉　望　(国土交通省　道路局　道路交通管理課)

鈴木　大健　(国土交通省　道路局　道路交通安全対策室)

木村　拓憲　(株式会社建設技術研究所中部支社道路・交通部)

原　祐樹　(株式会社建設技術研究所国土文化研究所　インテリジェンスサービスプラットフォーム)

杉浦　淳徳　(株式会社インフォマティクス営業部)

麻生　拓哉　(株式会社インフォマティクス営業部)

佐竹　絵美　(日本電気株式会社　警察・警備ソリューション第二統括部)

本田　詩音　(日本電気株式会社　警察・警備ソリューション第二統括部)

＜2407C＞
カンボジアにおける交通安全行動変容プログラムの開発と実施

(1) 研究目的と概要

アジアの途上国においては，経済成長を実現する中で，急速なモータリゼーションと道路整備が進み，大都市の郊外部や地方部においては，走行速度の上昇などに起因した交通事故の増加が共通課題となっている。カンボジアでも，幹線道路（国道 5 号線）の整備・高規格化に伴い，同様の課題が顕在化している。この対策の一つとして政府のアクションプランに交通安全教育や行動変容プログラムが位置づけられ，JICA による交通安全技術協力プロジェクトもスタートしている。

本プロジェクトは，IATSS フォーラム・カンボジア同窓会（CIAA)および JICA との連携に基づき，交通安全行動変容プログラムの開発と実施を目的としている。

昨年度より引き続き交通行動変容プログラムの効果を事前・事後の調査に基づいた分析を行い，もともと交通安全を意識していない生徒にとっては非常に効果的であることが確認された。他方，道路横断等について行動面の改善は明確にはみられておらず，プロジェクト終了後も，CIAA と現地の専門家チーム等とのさらなる連携強化により，行動変容プログラムの継続的な実施が望まれる為、これらの研究結果を取りまとめ、カンボジア政府に対して提言を行った。

(2) 研究経過

・アルメック（JICA 協力会社）との年間活動計画打ち合わせ(R06.04.14)
　昨年度の質問紙調査、動画撮影解析結果の共有、活動計画の決定
・第 1 回研究会(R06.06.10)
　質問紙調査、動画撮影解析結果についての議論
　JICA の探求学習教育プロジェクトについて
　カンボジア出張（事前質問紙調査）計画について
・アルメックとの情報共有(R06.07.10)
　質問紙内容の検討、現地出張計画の検討
・アルメックとの情報共有(R05.07.18)
　行動変容ワークショップ、スクールゾーンパイロットプロジェクト計画の共有
　カンボジア出張日程確認
・カンボジア出張(R06.08.26-30)
　コンポンチュナン州の中学校 2 校、小学校 2 校を選定し、コントロール校 2 校、トリートメント校 2 校に分け、行動変容プログラム実施前後での質問紙調査を実施した。併せて、登下校の様子を撮影し、生徒の危険行動の確認を行った。
・第 2 回研究会(R06.10.31)
　カンボジア出張結果の共有
　事後調査の出張日程の検討
・アルメックとの情報共有(R07.01.15)
　カンボジア出張日程確認
　質問紙調査の分析結果共有
　行動変容プログラムの実施状況の共有

・第 3 回研究会(R07.03.10)

カンボジア政府への提言資料の確認

3 年間の研究のとりまとめ、報告書作成について

・カンボジア出張(R07.03.17-21)

3 年間の研究のとりまとめの結果から、カンボジア政府に対し、今後の交通教育について提言を行った。

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 土井 健司	(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科 教授)
北村 友人	(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科 教授)
吉田 長裕	(IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科 准教授)
中村 彰宏	(IATSS 会員/中央大学経済学部 教授)
川口 純	(IATSS 会員/慶應義塾大学人文社会学系 准教授)
特別研究員	
葉 健人	(大阪大学大学院工学研究科 助教)
Or Vitou	(IATSS フォーラム・カンボジア同窓会(CIAA)会長)
Heang Omuoy	(CIAA 副会長)
Prom Sophea	(CIAA 副会長)
Nuon Kossoma	(IATSS フォーラム・カンボジア事務局／CIAA メンバー)
Chhaly Samsokrith	(CIAA メンバー)

＜2408B＞

協調的幸福感を高める交通社会の共生設計の試み
―サステイナビリティから豊かさを備えたリジェネレーションへ

(1) 研究目的と概要

近年、社会政策評価において協調的幸福の要素が重視されており、包括的幸せとしての well-being の向上が目標とされている。交通分野では、個人の自由や自己実現を求める獲得的幸福を追求する自動車社会から、シェアリング交通や MaaS による「移動具・サービス」の共有・利用社会への転換の兆しが見られる。しかし、その普及、主流化の道筋や条件は明らかではない。

本プロジェクトは、移動具・サービスの共有と共同化（多様性を維持し束ねること）が well-being を向上させる条件と効果を明らかにすることを目的とする。これは、新技術の経済的価値にとどまらず、共有・共同化がもたらしうる協調的幸福感、さらには well-being の向上に果たす効果を捉えるものであり、これを通じて交通社会の共生設計の試案を示すことを目指す。

この目的のため、本研究では1）モビリティライフスタイルに対し、幸福感がもたらす意識構造の日独比較、および2）行動経済学的モデルを用いた日本での互恵性の計測を行った。1）では、日独とも協調的幸福感の存在は確認できたが、それがモビリティライフスタイルに及ぼす影響は異なっており、日本では協調的幸福感の高さは自身の選好と社会的同調の双方と正の相関があるのに対し、ドイツでは、自身の選好とは負の相関が示された。2）では協調的行動には相手の状況の認識と利他的行動経験が影響することが示された。これらの結果から、日本でのシェアリングや EV 等の環境親和型モビリティ技術の普及促進策には、協調的幸福感への配慮が有効であり、それを通じた互恵的な経験が、モビリティライフスタイルの選択を強化すると考えられる。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.25)
　昨年度のアンケート調査の詳細分析結果の共有
　今年度の研究計画について

・第 2 回研究会(R06.09.20)
　利他性に関する仮説についての議論
　今年度のアンケート調査について

・国内アンケート調査の打ち合わせ（R07.01.09）
　アンケートの詳細設計、サンプル数などの検討

・国内アンケート調査（R07.01.20-22）
　「相手の便益が高いことを知った場合」や「利他的な相手であることを知った場合」に、その相手に対する協調的（利他的）行動のモチベーションは高まる、という仮説のもと、国内を対象に約 16,000 サンプルのアンケート調査を行った。

・ドイツでのアンケート調査（R07.01.06-31）
　幸福感は、自己効力感、社会規範への適合性、および技術利用がもたらす社会的影響に対する信念で特徴づけられると想定し、ドイツを対象に 1200 サンプルのアンケート調査を実施し、この構造仮説を検証した。

・第 3 回研究会(R07.02.11)

国内アンケート調査結果共有

ドイツでのアンケート調査結果共有

内部報告会資料の確認

・第 4 回研究会(R07.03.28)

研究結果のとりまとめと、報告書の作成について

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 紀伊　雅敦　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)

土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)

大口　敬　(IATSS 会員/東京大学生産研究所　教授)

中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)

松橋　啓介　(IATSS 会員/(国研)国立環境研究所　社会システム領域　室長)

平岡　敏洋　(IATSS 会員/(一財)日本自動車研究所　主席研究員)

特別研究員

長谷川　孝明　(IATSS 顧問/埼玉大学　名誉教授)

太田　豊　(大阪大学大学院工学研究科　特任教授)

三好　博昭　(同志社大学政策学部　教授)

前野　隆司　(慶應義塾大学大学院　システムデザイン・マネジメント研究科　教授)

葉　健人　(大阪大学大学院工学研究科　助教)

周　純瓢　(大阪大学大学院工学研究科　博士後期課程 3 年)

Christine Eisenmann (Brandenburgische Technische Universität (BTU), Professor)

＜2409B＞
日本型ラウンドアバウトの普及加速に向けての調査研究

(1) 研究目的と概要

IATSS がラウンドアバウト(RAB)に関するプロジェクトに平成 21 年に着手して以来、継続的に調査研究を進めることで、導入検討調査～社会実験～社会実装～法改正に伴う本格展開、と各段階において着実に成果に結びついてきた。現時点では全国で 160 余の RAB が整備されるに至っているが、先進諸国の中での普及レベルにおいては未だ緒に就いたばかりの状況である。平面交差部において交通事故が未だ後を絶たず、自動運転車の導入も期待されている中で、国際的視点に立ちつつ、日本にふさわしい RAB を普及させていく必要性は高い。このため、日本で RAB の普及を阻む課題の特定と解決が必要である。本研究プロジェクトでは、日本で特に重視されると考えられる、省スペース、省コスト、簡易設計、多様な利用者、合意形成プロセスなどの課題対応について、独自のスペックや手法を検討し、諸外国との相違を明らかにするとともに、これらを積極的に発信していくことにより、日本の RAB 普及促進に資することを目的とする。

本年度は、日本における RAB 導入に際して課題となる事項のニーズ調査として 2309A プロジェクトで実施した、全国基礎自治体等へのアンケート調査結果に基づき、RAB に対する認知度の低い地域を対象としてヒアリングを実施し、省コスト型構造や認知促進活動などの必要性などの課題を確認した。また、これまで RAB が導入されていない高知県と長崎県において RAB セミナーを実施し、参加した道路・交通管理者とともに、候補箇所での RAB 導入に関する意見交換を行った。その結果、高知県では信号交差点の RAB 化のフィージビリティスタディが開始され、長崎県諫早市では社会実験の実現に結びついた。さらに、小型など簡易構造の RAB に関して、日本型 RAB としての課題整理と、特に幾何構造要件に関わる技術的検討を進め、今後小型 RAB の社会実験により実証すべき項目の整理を行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.04.16)
　研究の趣旨の再確認
　各ワーキンググループ(WG1～5)の本年度の活動方針についての報告と議論
　(WG1：RAB 導入に際して課題となる事項のニーズ調査、WG2：海外動向調査、WG3：日本型 RAB の課題整理とスペック検討、WG4：セミナー開催、WG5：データベースの更新)

・社会実験(名古屋市)に関する検討・準備(R06.04.26～09.09)
　現地確認、打合せ（名古屋市側の事情により今年度の実施は見送り）

・RAB セミナー(四国地方)開催(R06.07.19)
　高知工科大学永国寺キャンパス(高知県高知市)にて、四国地域の道路管理者(国、県、自治体)と県警察本部を対象にセミナー(情報提供、基調講演、解説)と意見交換会(具体的な計画事例を基に)を実施

・RAB セミナー(長崎県)開催(R06.07.26)
　諫早市役所(長崎県)にて、長崎県内の道路管理者(国、県、自治体)と長崎県警察本部を対象にセミナー(情報提供、解説)と意見交換会(具体的な計画事例を題材に)を実施

・第 2 回研究会(R06.08.09)
　各ワーキンググループ(WG1～5)の活動進捗報告と議論

・ヒアリング調査(R06.10.29)
秋田県および青森県を対象に、認知度向上策の検討のためのヒアリング
・ヒアリング調査(R06.10.30)
福島県喜多方市を対象に、導入・普及に向けた検討のためのヒアリング
・社会実験(諫早市)打合せ・現地視察(R06.10.31)
セミナー開催後に社会実験開始が決定した長崎県諫早市の交差点について、警察協議打合せ(長崎県庁、諫早市役所)および現地視察
・第 3 回研究会(R06.11.12)
各ワーキンググループ(WG1～5)の活動進捗報告と議論
・ヒアリング調査(R06.12.12)
近鉄不動産および阪急阪神不動産を対象に、民間事業者の取り組みについてヒアリング
・ヒアリング調査(R06.12.17)
北海道札幌市を対象に、導入・普及に向けた検討のためのヒアリング
・現地視察(高知県四万十町)、打合せ(R06.12.19)
セミナー開催後に導入検討を開始した交差点について、現地視察および現地関係者(高知県、高知県須崎土木事務所四万十町出張所)との打合せ
・社会実験(諫早市)事前調査・打合せ(R07.01.29)
社会実験の事前調査(実験開始前の交通実態調査)と実験開始についての打合せ(諫早市役所)
・ヒアリング調査(R07.01.30)
鳥取県を対象に、認知度向上策の検討のためのヒアリング
・ヒアリング調査(R07.02.04)
千葉県君津市および木更津市を対象に、導入・普及に向けた検討のためのヒアリング
・ヒアリング調査(R07.02.07)
福島県只見町を対象に、導入・普及に向けた検討のためのヒアリング
・社会実験(諫早市)開始立ち合い(R07.02.14)
社会実験開始の立ち合いと現地視察
・第 4 回研究会(R07.02.21)
各ワーキンググループ(WG1～5)の活動進捗報告と議論
内部報告会の発表方針の検討
・社会実験(諫早市)事後調査(R07.03.24)
社会実験の事後調査(実験開始後の交通実態調査)

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 中村 英樹 (IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 教授)
井料 美帆 (IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 准教授)
鈴木 弘司 (IATSS 会員/名古屋工業大学社会工学科 教授)
永田 潤子 (IATSS 会員/大阪公立大学大学院都市経営研究科 教授)
浜岡 秀勝 (IATSS 会員/秋田大学大学院理工学研究科 教授)
特別研究員
阿部 義典 (国際航業㈱インフラマネジメント部 道路計画担当部長)

上坂　克巳　　(㈱片平新日本技研　専務取締役)
大橋　幸子　　(国土技術政策総合研究所道路交通研究部道路交通安全研究室　室長)
小笠原　魁　　(警察庁交通局交通規制課　規制第二係長)
奥城　洋　　(セントラルコンサルタント㈱東北支社道路交通部　上級主任技師)
康　楠　　(南京工業大学交通運輸工程学院　副教授)
神戸　信人　　(㈱オリエンタルコンサルタンツ交通運輸事業部　副事業部長)
久坂　直樹　　(パシフィックコンサルタンツ㈱中部支社交通基盤事業部　技術課長)
下川　澄雄　　(日本大学理工学部　特任教授)
鈴木　大健　　(国土交通省道路局環境安全・防災課道路交通安全対策室　企画専門官)
関口　貴志　　(㈱建設技術研究所中部支社道路・交通部　主幹)
高瀬　達夫　　(信州大学工学部　准教授)
高橋　健一　　(三井共同建設コンサルタント㈱道路第一部　部長)
竹本　由美　　((一財)国土技術研究センター　上席主任研究員)
立田　安礼　　(国土交通省道路局企画課　課長補佐)
田中　耕司　　(警察庁交通局交通規制課　課長補佐)
張　馨　　(名古屋大学大学院環境学研究科　講師)
宮坂　好彦　　(㈱建設技術研究所東京本社道路・交通部　主任技師長)
宗広　一徳　　((国研)土木研究所寒地土木研究所寒地交通チーム　主任研究員)
吉岡　慶祐　　(日本大学理工学部　准教授)
米山　喜之　　(㈱長大社会基盤事業本部設計保全事業部設計保全 1 部　担当部長)
渡部　数樹　　(㈱オリエンタルコンサルタンツ関東支社交通政策部　次長)

研究協力者

上田　元太　　(名古屋大学大学院環境学研究科　博士前期課程 1 年)

オブザーバー

松村　みち子　(IATSS 顧問/タウンクリエイター　代表)
牧内　一司　　(飯田市建設部地域計画課　課長)
松平　博文　　(飯田市建設部地域計画課　課長補佐)
四谷　晋司　　(名古屋市緑政土木局道路維持課　担当課長)
北川　貴史　　(名古屋市緑政土木局道路維持課　課長補佐)
中山　貴友　　(㈱道路計画技術部　課長)
多田　神　　((一財)国土技術研究センター　研究員)

＜2410B＞
子育てしやすく子どもにやさしい交通環境実現のための教育・行動変容プログラムの開発と適用

(1) 研究目的と概要

人口減少・少子高齢社会に直面する我が国において、子育てしやすく子どもにやさしい交通環境の整備が喫緊の課題である。本研究は、子ども連れおよび子どもの移動に必要な交通ルールやマナーに関する教育プログラム、および親による過度な自動車送迎を抑制するための行動変容プログラムを開発・適用し、その効果を検証することを目的とする。

本年度は、孫育て予備軍である大人・高齢者に対する教育プログラムの適用、子育て予備軍である大学生に対するバス／LRT 乗降体験を含む教育プログラムの効果検証、およびベトナムの大学生に対するオートバイで子ども連れで安全に外出する教育プログラムの適用を行った。その結果、大学生のみならず大人・高齢者にも、心のバリアフリーを促進する可能性があり、海外でも、当該国・都市の文化/交通特性を反映したプログラムの実施により、安全な子ども連れ外出を促進できる可能性があることを明らかにした。また、子どもの移動自由性（CIM）および親による自動車送迎に関するアンケート調査データの分析、LRT 開業による子育て世帯の交通行動の変化に関するアンケート調査の実施と分析により、大都市と比較して地方都市では、施設配置・公共交通環境等により CIM が低く、親の自動車送迎に依存せざるを得ない子育て世帯が多いこと、LRT などサービスレベルの高い公共交通導入が、CIM 向上と親の自動車送迎減少に寄与する可能性があることを明らかにした。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会（R06.05.16）
　研究プロジェクト概要説明（大森先生）
　ベトナムにおける子供を乗せた運転中の親の危険運転行動の蔓延と影響要因（Dr. Duy）
　マレーシアの幼児（0～6 歳）を持つ親の旅行と移動に関する調査（Dr. Adilah）

・金沢市の粟崎小学校　での WS （R06.06.29）
　粟崎地区安全協会等主催の「おとなとこどもの自転車教室」に参加し、子載せ自転車とベビーカーに関する WS を実施

・Asian-Pacific Planning Societies 2024 国際会議参加＆市場調査（韓国）（R06.08.22-25）
　研究協力者　宋浩然氏と大森先生がプロジェクト研究を発表。また韓国市内の子連れ外出等の市場調査を実施

・第 2 回研究会(R06.09.25)
　金沢市粟崎小学校におけるワークショップの報告（浅野先生）
　孫育て予備軍に対する子ども連れ外出教室ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの試行（大森先生）
　中国都市部における小学生への交通安全教室の評価（宋）

・宇都宮大学　車いす、ベビーカーの WS（R06.10.03）
　宇都宮大学1年生、2 年生を対象に車いす、ベビーカーの安全教室を座学を行い、また実際のバスを利用してのベビーカーと車いすのバス乗降を体験

・大森先生ベトナム出張　（R06.11.08-11）
　ダナン大学　Duy 先生とベトナム WS 準備・打合せ

・ベトナム ダナン工科大学での WS と市場調査(R06.11.20-24)
大森先生、趙先生、宮崎先生がダナン大学にて WS 参画し、またダナン市他の子載せ 2 輪車についての市場調査を実施
・宇都宮大学 LRT を使ったベビーカー、車いす体験 WS(R06.12.04)
宇都宮大学の 3 年、4 年を対象として、ライトレール平石停留所において実際の LRT を使ってベビーカーと車いすでの乗降の体験WSを実施
・宇都宮放送大学 WS(R06.12.08)
熟年層により子載せ自転車、ベビーカーの体験学習のWS実施
・第 3 回研究会(R07.02.05)
ロンドン交通局 Catriona Barker 氏のプレゼン
内部報告会資料打合せ

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 大森 宣暁 (IATSS 会員/宇都宮大学地域デザイン科学部 教授)
中村 文彦 (IATSS 会員/東京大学大学院新領域創成科学研究科 特任教授)
土井 健司 (IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科 教授)
北村 友人 (IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科 教授)
吉田 長裕 (IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科 准教授)
松橋 啓介 (IATSS 会員/(国研)国立環境研究所社会システム領域 室長)
小嶋 文 (IATSS 会員/埼玉大学大学院理工学研究科 准教授)

特別研究員
太田 勝敏 (IATSS 顧問/東京大学 名誉教授)
松村 みち子 (IATSS 顧問/タウンクリエイター 代表)
谷口 綾子 (筑波大学大学院システム情報工学研究科 教授)
宮崎 耕輔 (香川高等専門学校 教授)
浅野 周平 (福井大学工学部 講師)
長谷川 万由美 (宇都宮大学教育学部 教授)
松田 妙子 (NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事)
北方 真起 (WA-LIFE Labo 代表)
土橋 喜人 (金沢工業大学 教授)
趙 勝川 (城西国際大学 教授)
Owen Waygood (Polytechnique Montréal 教授)
Tran Thi Phuong Anh (Danang University of Science and Technology 助教)
パラディ ジアンカルロス (東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 講師)
Yong Adilah Binti Shamsul Harumain (Universiti Malaya 講師)
Nguyen Phuoc Quy Duy (University of Science and Technology - The University of Danang 主任講師)

研究協力者
宋 浩然 (宇都宮大学大学院 博士後期課程2年)
石河 万衣 (香川高等専門学校 専攻科 1 年)
Gledisa GOLIKJA (東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻、研究生)

オブザーバー
山本 力也 (パナソニックサイクルテック株式会社)

＜2411B＞

ウェルビーイング向上のための二輪車のブランディング
～二輪車死亡・重症事故防止に向けた安全教育～

(1) 研究目的と概要

本プロジェクトは、日本自動車工業会の「二輪車事故防止に向けた産官学連携会議」と連携し、二輪車の死亡・重傷事故を減少させ、安全性を向上させることで二輪車の価値を再認識することを目標としています。二輪車は移動の自由度が高い一方で、事故リスクが高く、特にヘルメットの脱落が重大事故の一因となっています。ここでは、ヘルメット脱落のメカニズムを解明し、その結果を用いた教育・啓発策の開発や法整備の必要性を検討するアプローチを採用しました。

二輪車は移動の自由度が高い一方で、事故リスクが高く、特にヘルメットの脱落が重大事故の一因となっている。日本では二輪車死亡事故の約 30%にヘルメットの脱落が関係し、その主な要因はあご紐の未締結や不適切なサイズの使用である。現行の道路交通法には着用義務はあるものの、適正装着に関する具体的な規定はない。本研究では、ヘルメット脱落のメカニズムを解明し、その結果を用いた教育・啓発策の開発や法整備の必要性を検討した。以下に具体的な実施内容を示す。

① 81 回の模擬衝突実験から、ヘルメットの脱落状況を分析した。その結果、適正装着が安全性向上に不可欠であり、工学的なメカニズム解明には事故データを加味したさらなる分析が求められた。

② 実験映像を活用し、ライダーの属性に応じた教育教材を思案中。ターゲット層の一つである若年層向けにアンケートを実施し、専門家と議論を重ねながら、ショート動画などの訴求効果のある手法を検討した。

③ 海外のヘルメット法規を調査し、日本での法整備の必要性を議論した。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.29)

令和 6 年 3 月の海外調査(タイ)結果の報告

今年度の研究計画について

・第 1 回 WG(R06.07.24)

ヘルメット脱落メカニズム解明

ITARDA 事故データからヘルメット脱落状況を推定・分析方法を検討

・第 2 回研究会(R06.07.31)

WG1 の検討状況報告

WG2 の活動方法についての意見出しとトライアルターゲットの選定

海外へのヘルメット脱落防止などの知見展開について

地方山間部などでの二輪車の利活用に関して

JAMA の後期スケジュールを踏まえた研究会のスケジュールと検討項目の整理

・第 2 回 WG(R06.10.30)
ヘルメット脱落削減のための教材の提案

・第 3 回研究会(R07.01.21)
ヘルメット脱落メカニズム分析の進捗確認
ヘルメット脱落削減のための教材提案状況確認
ITARDA 事故データからヘルメット脱落状況を推定・分析する方法の検討
海外調査・展開について
JAMA 産官学連携会議との連携と対四輪事故分析での対象項目について

・第 4 回研究会(R07.02.17)
各検討項目の進捗について
JAMA 産官学連携会議との連携について
内部報告会について

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 関根 太郎 (IATSS 会員/日本大学理工学部 機械工学科 教授)
小川 和久 (IATSS 会員/東北工業大学 総合教育センター 教授)
北村 友人 (IATSS 会員/東京大学大学院 教育学研究科 教授)
小早川 悟 (IATSS 会員/日本大学理工学部 交通システム工学科 教授)
中村 文彦 (IATSS 会員/東京大学大学院 新領域創生科学研究科 スマートシティデザイン研究社会連携講座 特任教授)
平岡 敏洋 (IATSS 会員/(一財)日本自動車研究所 主席研究員)
小竹 元基 (IATSS 会員/東京科学大学 工学院機械系 教授)
田久保 宣晃 (IATSS 会員/(公財)交通事故総合分析センター 研究部次長兼研究第一課長)

特別研究員
福田 敦 (IATSS 顧問/日本大学理工学部 交通システム工学科 教授)
西本 幸正 (IATSS 顧問)
田代 邦幸 (合同会社 Office SRC 代表)
徳永 武雄 (本田技研工業㈱ ソフトウェアデファインドモビリティ開発統括部 アシスタントチーフエンジニア)
飯田 剛 (日本自動車工業会 二輪車委員会 安全教育分科会 分科会長、ホンダ)
山田 慧 (日本自動車工業会 二輪車委員会 安全教育分科会 委員、ホンダ)
早田 和正 (日本自動車工業会 二輪車委員会 安全教育分科会 委員、ヤマハ)
大野 匠 (日本自動車工業会 二輪車委員会 安全教育分科会 委員、スズキ)
安藤 秀明 (日本自動車工業会 二輪車委員会 安全教育分科会 委員、カワサキ)

オブザーバー
牧 丈二 (警察庁交通局 交通企画課 交通安全企画官)
小野寺 俊 (警察庁交通局 交通企画課 課長補佐)
鳴海 亨 (警察庁交通局 交通企画課 係長)
松坂 真史 (国土交通省物流・自動車局車両基準・国際課 車両安全対策調整官)

金井　悟　　（国土交通省物流・自動車局車両基準・国際課　係長）
吉田　智宏　　（日本自動車工業会　次世代モビリティ領域　事務局）
志村　祐樹　　（日本自動車工業会　次世代モビリティ領域　事務局）

＜2412B＞
小型電動モビリティの受容性、安全性向上に向けた環境整備に関する国際比較研究

(1) 研究目的と概要

安全快適な交通の実現のため、電動キックボード、座り乗りの超小型モビリティなど様々な小型電動モビリティの普及展開が期待されている。本プロジェクトでは、1-2 人乗りの小型電動モビリティを対象として社会的受容性、安全性向上に向けた環境整備に関する研究を行った。本研究の成果は以下の通りである。

①道路交通法改正後の現地調査や国内外の事例調査を通じて、車道/歩道を利用する小型電動モビリティ（主に電動キックボード）に関する検討を深めることや、単路・交差部等での課題や対応策を整理することができた。

②構内実験を踏まえて、歩行者、自転車や小型電動モビリティ利用者にとって安全で受容される道路横断面構成を示唆することができた。

③小型電動モビリティ（電動キックボード(特定小型)）の安全な利用方法について、運転免許非保有者への安全教育のためのコンテンツ作成を進めることができた。

上記の成果を踏まえた今後の課題は以下のとおりである。

① 研究成果について、道路管理者、事業者との意見交換を行うことで、現場でのニーズを汲み取りつつ、一般の方々に IATSS 研究の成果を広めていくこと
② 成果物を使った運転免許非保有者への安全教育を行うこと
③ 速度レベルの異なるモビリティが混在する階層的道路
④ ネットワークの明示や分離に伴う安全性向上の効果を計量すること

(2) 研究経過

・第 1 回研究会（R06.04.24）
　過年度振り返り：内部報告会、国際ワークショップ（英国 UCL PEARL（R06.03.08））
　本年度プロジェクトの進め方
　WG 報告（アンケート調査、挙動分析）
・第 2 回研究会（R06.09.18）
　WG 報告：WG1(利用者心理・安全教育)、WG2（現地調査、構内実験）、WG3（国際 WS）
・路上実験（於名古屋工業大学（R06.10.～R06.12）
　名古屋工業大学構内路上にて、電動キックボード、自転車、歩行者の並走における挙動実験実施
・第 3 回研究会(R06.12.16)
　WG 報告：WG1(利用者心理・安全教育)、WG2（現地調査、構内実験）、WG3（国際 WS）
・第 4 回研究会(R07.02.16)
　WG 報告：WG1（利用者心理・安全教育）、WG2（現地調査、構内実験）
　内部報告会と今後の展開

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 鈴木　弘司　　(IATSS 会員/名古屋工業大学　社会工学科　教授)

小川　和久　　(IATSS 会員/東北工業大学　教職課程センター　教授)

小竹　元基　　(IATSS 会員/東京科学大学　工学院機械系　教授)

関根　太郎　　(IATSS 会員/日本大学　理工学部　教授)

土井　健司　　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　地球総合工学専攻　教授)

井料　美帆　　(IATSS 会員/名古屋大学大学院　環境学研究科　准教授)

柴山　多佳児　(IATSS 会員/ウイーン科学大学交通研究所　上席研究員)

特別研究員

猪井　博登　　(富山大学大学院　理工学研究部　准教授)

太田　勝敏　　(IATSS 顧問)

鶴賀　孝廣　　(IATSS 顧問)

柴山　多佳児　(ウイーン科学大学交通研究所　上席研究員)

鈴木　一史　　(群馬工業高等専門学校　環境都市工学科　准教授)

鈴木　立人　　(ロンドン大学　研究技官)

高田　実宗　　(駒澤大学法学部　准教授)

立松　秀樹　　(㈱オリエンタルコンサルタンツ　中部支社総合計画部　副部長)

吉岡　慶祐　　(日本大学　理工学部　助教)

Alhajyaseen Wael (カタール大学　准教授)

Nick Tyler　　(University　College　London　教授)

共同研究者

森　庸太朗　　(株式会社ストリーモ　代表取締役)

岸川　景介　　(株式会社ストリーモ　取締役)

橋本　英梨加　(株式会社ストリーモ　取締役)

研究協力者

伊藤　大貴　　(名古屋工業大学大学院　博士後期課程)

日比野　秀俊　(名古屋大学大学院　博士前期課程)

オブザーバ

西口　諒一　　(警察庁交通局交通企画課　課長補佐)

伊藤　桜　　(警察庁交通局交通企画課　係長)

＜2413A＞

セーフシステムアプローチを用いたタイにおける二輪車重大事故削減施策の検討

(1) 研究目的と概要

タイでは、二輪車の関わる事故件数、死傷者数は 40%を占め、負傷者数では 77%に上っている(2002～2017)。国際比較では、二輪事故による死亡率は世界で最も高く(2015)、その多くは不適切な二輪車の運用にあることが報告されている。タイにおける日本ブランドの二輪車シェアが 9 割を占める一方で、その利用及び事故背景については明らかになっておらず、有効な交通安全対策の実施やそれらを支える政策体系についても十分に確立するまでには至っておらず、依然として高い交通事故死者数が報告されている。

そこで、本プロジェクトでは、タイにおける交通事故の状況を踏まえた上で、交通安全計画の実施状況についてレビューを行い、セーフシステムアプローチの観点から現状の課題を整理する。次に、二輪車利用者の観点から交通安全に関わるシステムがどのように機能しているのか調査を行い、重大事故の削減に繋がる実行可能な介入策の検討を行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.11.21)
　今年度の研究調査委について
・第 1 回海外調査(R06.10.17-18、28-29)
　タイでの交通安全関連ステークホルダーへのインタビューを実施
　セーフシステムアプローチの観点から現状の課題を整理
・第 2 回海外調査(R07.02.17-18)
　タイでの二輪車利用者の家庭訪問パイロット調査から若者の利用実態を調査
　タイホンダインストラクターへのヒアリングから安全運転受講者の安全意識実態を調査
　若者二輪車利用者の現状の課題を整理
・第 2 回研究会(R07.02.10)
　前回の研究会の振り返り
　タイでの実態調査および内部報告会について

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 吉田　長裕　　(IATSS 会員/大阪公立大学大学院　工学研究科　准教授)
　岡村　和子　　(IATSS 会員/科学警察研究所　研究室長)
　田久保　宣晃　(IATSS 会員/ (公財)交通事故総合分析センター　研究部次長　兼　研究第一課長)
　中村　彰宏　　(IATSS 会員/中央大学　経済学部　教授)

特別研究員
　福田　敦　　(IATSS 顧問/日本大学理工学部　交通システム工学科　教授)
　葉　健人　　(大阪大学大学院　工学研究科　助教)
　杉本　富史　　(TMG コンサルティング　代表)
　中西　盟　　(交通心理士)

藤山 拓　(University College London, Assoc. Prof. Dr)

Divera Twisk　(Centre for Future Mobility/CARRSQ, Queensland University of Technology (QUT), Australia Adjunct Prof.)

Sittha Jaensirisak　(ATRANS、Ubonratchathani Uviversity, Thailand Asst. Prof. Dr)

Varameth Vichiensan　(ATRANS、Kasetsat University, Thailand Assoc. Prof. Dr)

Paramet Luathep　(ATRANS、Songkla University, Thailand Assoc. Prof. Dr)

Pawinee Iamtrakul　(ATRANS、Thammasart University, Thailand Assoc. Prof. Dr)

Chun-Chen Chou　(Graduate School of Engineering Osaka University Phd student)

＜2414B＞
都市はウォーカブルになるべきなのか？
－データに基づく分野横断的議論－

(1) 研究目的と概要

今日のまちなか整備で「ウォーカブル」は絶対的な善として位置づけられ、先進事例の紹介とともに、より歩きやすくするための工夫が数多く提唱されている。しかし、本当に都市はウォーカブルになれば良いのだろうか？

本研究はこの問題意識に立ち、メンバーが実測から取得するデータをもとにして、多様なメンバーで議論することで、今後のウォーカブル推進において考慮すべき点を抽出し、より良好なまちなか空間の創出手法を構築することを目指す。

令和 6 年度は研究会開催に加えて、千代田区の Marunouchi Street Park での実測調査、酒田市交通政策との連携、タイ・チュラロンコン大学、タマサート大学との連携を進めた。実測、GPS ログデータ等を用いたデータ解析、視察やステークホルダーとの意見交換結果をもとに研究会で議論し、①「ウォーカブル」にすることによって得られる便益の評価に向けたアプローチ方法の整理・具体的な空間整備手法の提示、②広域交通計画・交通ネットワークとの連携、③熱帯地域におけるウォーカブルな空間創出の意義・空間整備手法の提示を行った。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会、丸の内ストリートパーク視察(R06.08.08)
　丸の内ストリートパークの視察結果の共有
　令和 5 年度の内部報告会結果の共有
　今期の活動計画・国内外調査についての議論
・第 2 回研究会(R06.09.23)
　歩行と交通心理学・歩行シミュレーションについて議論
　山形県酒田市の視察について議論
・山形県酒田市の市長との懇談・視察(R06.11.29)
　酒田市長・副市長との都市交通やウォーカビリティに関する議論
　酒田市内のウォーカブルなまちづくりに関する現地視察
・海外視察タイ(R07.02.16-17)
　チュラロンコン大学とタマサート大学とのウォーカブルに関する議論
　タイのウォーカブルなまちづくりに関する現地視察

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 村上　暁信　　(IATSS 会員/筑波大学システム情報系　教授)
　一ノ瀬　友博　(IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授)
　神田　直弥　　(IATSS 会員/東北公益文科大学　学長・教授)
　久保　正男　　(IATSS 会員/防衛大学校　准教授)
　小嶋　文　　(IATSS 会員/埼玉大学大学院理工学研究科　准教授)
　後藤　孝夫　　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)

柴山　多佳児　　（IATSS 会員/ウィーン工科大学　交通研究所　上席研究員）

土井　健司　　（IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授）

オブザーバー

井上　莉緒　　（大阪大学大学院工学研究科　修士課程 2 年）

＜2420B＞
ウォーカブル・シティ評価手法の成果公表と実装

(1) 研究目的と概要

日本では急激な人口減少、超高齢化を迎え、都市のコンパクト化が進められている。しかし、ただ単に都市をコンパクトにすれば良いわけではなく、都市の活力を維持し、魅力を向上させるために「居心地が良く歩きたくなるまちなか」からはじまる都市再生が 2019 年に国土交通省に設置された懇談会で提唱され、2020 年度から「まちなかウォーカブル推進プログラム」がスタートすることになった。2020 年から取り組んできた研究調査プロジェクト「ウォーカブル・シティ評価手法の開発」では、欧米の研究や事例を参照し、ウォーカブルな都市（ウォーカブル・シティ）を包括的に評価する手法を研究してきた。本社会貢献プロジェクトではこれまでの成果をとりまとめ、論文、図書として公表すること、国土交通省都市局と連携し、日本の都市のウォーカビリティ評価に成果を実装させることを目的とする。

令和 6 年度（2 年目）の成果は以下の通りである。

- 令和 6 年 9 月 23 日に東京ステーションコンファレンスにおいて、公開シンポジウム「ウォーカブルなまちを評価する」を開催した。
- 令和 6 年 2 月 25 日に鹿島出版会より「ウォーカブルなまちを評価する」（一ノ瀬友博・国際交通安全学会ウォーカブルなまち研究会編著）を出版した。
- 国土交通省の居心地のよいまちなかを測る指標に、研究成果を提供した。

(2) 研究経過

- 第 1 回研究会(R06.05.08)
  R5 年度の内部報告会結果の共有
  書籍出版や公開シンポジウムなど今年度の計画について検討
  国土交通省の指標公表について情報共有を実施
- 第 2 回研究会(R06.07.10)
  出版する書籍の内容および公開シンポジウムの内容の擦り合わせ
  国際学会で論文発表する内容について情報共有を実施
- 国際学会での論文発表(R06.08.21-25)
  ソウルで行われた Asian-Pacific Planning Societies 2024 で研究成果を発表
- 公開シンポジウム（R06.09.28）
  「ウォーカブルなまちを評価する」をテーマに、東京ステーションコンファレンスにおいて公開シンポジウムを開催
- 第 3 回研究会(R07.01.09)
  出版する書籍の内容の擦り合わせ、内部報告会での報告内容について議論

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 一ノ瀬　友博　（IATSS 会員/慶應義塾大学環境情報学部　学部長・教授）
岩貞　るみこ　（IATSS 会員/モータージャーナリスト）
紀伊　雅敦　（IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授）
小嶋　文　（IATSS 会員/埼玉大学大学院理工学研究科　准教授）

柴山　多佳児　（IATSS 会員/ウィーン工科大学 交通研究所 上席研究員）
土井　健司　　（IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授）
松橋　啓介　　（IATSS 会員/（国研)国立環境研究所社会システム領域　室長）
馬奈木　俊介　（IATSS 会員/九州大学大学院工学研究院　教授）
村上　暁信　　（IATSS 会員/筑波大学システム情報系 教授）
森本　章倫　　（IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科 教授）

特別研究員

井上　莉緒　　（大阪大学大学院工学研究科 修士課程 2 年）
岩崎　寛　　（千葉大学大学院園芸学研究院 教授）
長田　哲平　　（宇都宮大学地域デザイン科学部 准教授）
田島　夏与　　（立教大学経済学部経済政策学科 教授）
鳥海　梓　　（東京大学生産技術研究所　特任准教授）

オブザーバー

藤原　聖也　　（国土交通省都市局まちづくり推進課　政策係長）
齋藤　正樹　　（国土交通省都市局まちづくり推進課　事業管理係長）

＜2421B＞
中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動

(1) 研究目的と概要

大阪府立豊中高等学校・能勢分校は、中山間部に位置する学校であるが、文部科学省の「地域協働推進校（グローカル型）事業特例校」に指定されるなど、グローカル人材育成を目指しユニークな教育活動に取り組んでおり、地域での進学希望者も多い。しかし、近年では進学希望者が通学を理由に入学を断念するなど、「通学課題」が挙げられ、入学者の減少・定員割れが続いている。現在、徒歩や路線バス、自動車での送迎といった通学手段があり、それ以外は自転車が最終的な手段となっているが、自転車通学においては、安全面で中山間エリア特有の課題を抱えている。

本プロジェクトは、高校生に電動アシスト付き自転車（e-bike）という新たな交通手段を提供することで、交通安全教育を通した課題解決力の向上を目指すと共に、地域課題全体の解決への展開を図ってきた。今年度は、令和 3 年度から実施してきた本プロジェクトの成果をまとめ上げ、書籍として刊行することを最も重要な目的として実施した。

本プロジェクトの成果を発信し、高校生たちによる地域課題解決のための取り組みのモデルを提唱するために、書籍の編集を行った。この書籍は、令和 7 年 3 月に東京大学出版会から刊行された。同書では、これまでの研究で行ってきた諸活動（交通安全教育、e-bike の運転技能訓練、地域課題改善のためのワークショップ）を紹介すると共に、能勢分校の生徒たちの声をできるだけ掲載することで、高校生たちの思いや考えがより明確に伝わるような工夫を行った。また、高校生による地域課題解決改善のための教育モデルを提示した。

書籍の編集に加えて、本プロジェクトの初年度（令和 3 年度）から行っている高校生たちの交通行動調査を継続して実施した。また、高校生たち自身が能勢町役場に安全な通学路を整備するための提言をまとめるために、多様なステークホルダーによるワークショップを開催し、地域に展開した。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.27)
　プロジェクトと今年度活動計画の説明
　　①出版企画に関する説明
　　②今年度ワークショップの計画説明
　e-bike 通学状況、活動報告
　事故報告、安全対策について
・生徒対象説明会/自転車安全運転研修(R06.07.12)
　これまでの活動の振り返り
　令和 6 年度活動計画の説明
・e-bike の活用に関するワークショップ①(R06.09.12)
・第 2 回研究会(R06.09.24)
　出版企画について
　ワークショップについて
　　①9 月 12 日 WS の成果報告

②10 月 7 日 WS の内容説明と今後の展開
交通行動の更なる調査の可能性について
・e-bike の活用に関するワークショップ②(R06.10.07)
・交通安全教育ワークショップ(交通行動調査)(R06.11. 20)
・第 3 回研究会(R07.01.30)
交通行動調査についての報告
10 月 7 日 WS の成果と今後の展開
出版企画の進捗状況についての報告
e-bike 寄贈について
内報の準備について

(3) プロジェクトメンバー(敬称略)

PL 北村 友人 (IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科 教授)
大森 宣暁 (IATSS 会員/宇都宮大学地域デザイン科学部 教授)
川口 純 (IATSS 会員/慶應義塾大学人文社会学系 准教授)
神田 直弥 (IATSS 会員/東北公益文科大学 学長・教授)
柴山 多佳児 (IATSS 会員/ウィーン工科大学 交通研究所 上席研究員)
土井 健司 (IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科 教授)
中井 宏 (IATSS 会員/大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)
馬奈木俊介 (IATSS 会員/九州大学大学院工学研究院 教授)
吉田 長裕 (IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科 准教授)

特別研究員
猪井 博登 (富山大学都市デザイン学部都市・交通デザイン学科 准教授)
榎原 友樹 (能勢・豊能まちづくり 代表取締役)
奥山 祐輔 (黒井産業㈱ 黒井交通教育センター本部マネージャー)
上西 将司 (大阪府立豊中高等学校能勢分校 教諭(地域魅力化クラブ顧問))
岸上 祐子 (九州大学大学院工学研究院 特任助教)
熊手 俊行 (大阪府豊能郡能勢町役場 総務部総務課 課長)
周 純甄 (大阪大学大学院工学研究科 博士後期課程 3 年)
菅原 亮 (大阪府立豊中高等学校能勢分校 准校長)
永井 克治 (能勢・豊野まちづくり 地域サービス開発部)
矢立 智也 (大阪府豊能郡能勢町役場 総務部総務課)
山﨑 瑛莉 (上智大学 Sophia Future Design Platform 推進室 University Education Administrator)
葉 健人 (大阪大学大学院工学研究科 助教)

研究協力者
佐々木 慎之介 (大阪大学工学部地球総合工学科 4 年)

＜2422A＞

啓発動画を活用したアジア地域における健康起因事故防止の普及活動の展開

(1) 研究目的と概要

近年、運転者の健康状態が交通事故の主要な危険因子であることが報告されており、わが国でも健康起因事故防止は交通事故対策の重要な課題と認識されている。しかし、健康起因事故については、多くの人々が未だ十分認識しておらず、特にアジア地域ではその対策はほとんど行われていない。

この様な状況の中、一般の人々に広く健康起因事故について知ってもらうことを目的として、2020 年度の社会貢献プロジェクトで健康起因事故防止の啓発動画を作成した。これまでに多くの運輸関連団体等に対して周知を行っていたが、本年度のプロジェクトでは、本啓発動画を活用し、国内外でより一層の普及活動を展開し、健康起因事故の防止に寄与することを目的とし、本年度は以下の啓発活動を行った。

①IATSS の Web サイトに利用申請窓口を設置

動画の利用申請窓口を設置したことにより、利用しやすくなったとともに、利用状況が把握できるようになった。令和 6 年度は、啓発動画の使用許可依頼が 12 件あった。

②国内・国外への普及活動

シンポジウムの開催やプロジェクトメンバーにより国内外での普及を進めた結果、啓発動画の再生回数が増加した。一方で、外国語版の啓発動画は大きく再生回数が伸びず、今後、更なる広報が必要であると考えられる。

③教育プログラムの作成と WS の実施

啓発動画を用いた教育プログラムを開発し、ワークショップを開催した。教育プログラムにより、健康起因事故への理解が深まる可能性が示された。

(2) 研究経過

・第 1 回研究会(R06.05.14)

メンバー紹介

今年度のプロジェクト概要の説明

・第 2 回研究会(R06.10.08)

友岡先生 ATRANS の報告

啓発動画を用いた教育プログラム WS の報告（奥山様）

地域包括支援センターにおける取り組み、講習会の報告（﨑山先生）

IATSS の HP について

今後の予定

・ワークショップ「緑内障による健康起因事故防止啓発学習プログラム」および、シンポジウム「健康起因事故の予防と対策～睡眠時無呼吸症候群・視野障害による交通事故～」の開催（R07.02.05）

・第 3 回研究会(R07.02.18)

ワークショップ、シンポジウムの振り返り

内部報告会に向けて

(3) プロジェクトメンバー

PL 谷川　武　　(IATSS 会員/順天堂大学医学部公衆衛生学講座　主任教授)

浅野　水辺　　(IATSS 会員/愛媛大学大学院医学系研究科　教授)

大口　敬　　(IATSS 会員/東京大学生産技術研究所　教授)

岡村　和子　　(IATSS 会員/科学警察研究所　研究室長)

神田　直弥　　(IATSS 会員/東北公益文科大学　学長・教授)

高橋　正也　　(IATSS 会員/(独) 労働者健康安全機構　労働安全衛生総合研究所　センター長)

土井　健司　　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)

特別研究員

蓮花　一己　　(IATSS 理事/帝塚山大学　名誉教授　客員教授)

太田　和博　　(IATSS 顧問/専修大学商学部　教授)

植田　結人　　(順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座　助教)

奥山　祐輔　　(黒井産業(株)黒井交通教育センター本部　マネージャー)

國松　志保　　(医療法人社団済安堂　西葛西・井上眼科病院　副院長)

黄　家琦　　(順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座　博士課程)

﨑山　紀子　　(順天堂大学医学部衛生学・公衆衛生学講座　非常勤助教)

朱　沁曄　　(順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座　博士課程)

庄　岩　　(順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座　博士課程)

友岡　清秀　　(順天堂大学医学部衛生学・公衆衛生学講座　助教)

福島　史人　　(埼玉県済生会加須病院　救急医学科　科長)

三好　規子　　(愛媛産業保健サービス株式会社　代表)

Naricha Chirakalwasan　　(Chulalongkorn University)

オブザーバー

井上　大輔　　(警察庁　交通局　交通企画課　法令係　係長)

奥平　賢治　　(国土交通省　物流・自動車局　安全政策課　専門官)

亀田　義人　　(順天堂大学医学部公衆衛生学教室　准教授)

田中　陽　　(警察庁　交通局　運転免許課　課長補佐)

松山　隆　　(警察庁　交通局　運転免許課　係長)

和田　裕雄　　(順天堂大学大学院医学研究科　教授)

＜海外調査＞
2430　未来の都市の交通及び安全に係る取り組みの調査研究

(1) 研究目的と概要

本プロジェクトは、若手研究者が交通と安全に関する自らの興味関心に基づいて、様々な国や地域を訪れ、実際のフィールドを見て学んだり、現地の研究者や実務者と会って、知見を得たり共有したりする機会の実現を支援するものである。著名研究者との面会、研究会合等への参加、視察（交通安全、都市、環境などに関わる先進事例）など、広範囲の活動を対象とする。本プロジェクトでの経験が若手研究者の成長に資することを期待すると同時に、将来的に IATSS で活躍いただける人材を育成する意味合いもある。

今年度も昨年度のやり方を踏襲し、このプロジェクトの場を、異分野の研究者とのコミュニケーションの機会を持ったり、繋がりができるきっかけにしたいということから、これまで IATSS と関係性の深い 2 か国（英国、タイ）に調査対象国を絞り、若手研究者が同じような日程で現地に滞在してそれぞれの調査を行う傍ら、何回かお互いの調査状況を共有し、意見交換する機会を設けることとした。今年度は以下の6つの調査活動を行った。

英国

・「英国における自動運転研究開発の動向調査」（石井）
・「イギリスにおける Micro-E-Mobility の利用状況及び道路利用者の安全性向上、普及に向けた課題の把握」（佐々木）
・「ウエルビーイング向上を目的とした産官学民の共創型アプローチによる都市・交通政策の実施効果に関する調査－ブリストル市を対象事例として」（曽）

タイ

・「タイにおける自動二輪車混在交通容量および信号制御方法の実態調査」（青山）
・「バンコク郊外及び地方都市における公共交通の実態調査」（須ヶ間）
・「画像解析に基づく道路維持・管理のためのデジタルツインの構築に向けた舗装路面の評価実験および社会実装の可能性調査」（八木）

(2) 研究経過

・第 1 回研究会（R06.05.20）
　メンバー顔合わせ、調査概要の紹介と質疑等、IATSS 海外出張に係る手配・諸手当・費用精算概要の説明
・第 2 回研究会（R06.07.23）
　調査スケジュール最終案の紹介と質疑等
・第 3 回研究会（R06.11.21）
　調査報告発表と質疑等、内部報告会での発表及び報告書作成に関する概要説明
・内部報告会の資料準備と発表の実施（R07.02.14-03.01）
・報告書提出と内容チェック、ホームページ掲載（R07.03.14-31）

(3) プロジェクトメンバー

PL 中村　文彦　　(IATSS 会員/東京大学大学院新領域創成科学研究科　特任教授)

北村　友人　　(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科　教授)

関根　太郎　　(IATSS 会員/日本大学理工学部機械工学科　教授)

中村　彰宏　　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)

特別研究員

青山　恵里　　(日本大学理工学部交通システム工学科　助教)

石井　響弥　　(東京大学大学院工学系研究科　博士課程 3 年)

佐々木　啓太　(名古屋工業大学大学院　博士後期課程 1 年 /
株式会社オリエンタルコンサルタンツ中部支社交通政策部　技師)

須ヶ間　淳　　(埼玉大学大学院理工学研究科　助教)

曽　翰洋　　(大阪大学工学研究科地球総合工学専攻　博士後期課程 2 年)

八木　雅大　　(北海道大学大学院工学研究院　特任助教)

＜2370 国際発表＞
2321A　中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動

(1) 研究目的と概要

「国際発表」プロジェクトは、以下の目的のため、前年度に実施した研究プロジェクトの中から、著しい成果の認められたプロジェクトに対し、国際的な会議等で発表する機会を設けるものである。

目的:

・IATSS の研究成果を国際的に広く周知すること
・期待される若手研究者に国際的な会議への参加の機会を提供すること
・IATSS の国際的な認知度を向上させること

(2) 実績

2321A「中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動」

・発表イベント

イベント名 :15th World Conference on Injury Prevention and Safety Promotion（SAFETY 2024）
開催地　　:インド　ニューデリー（現地参加）
期間　　:令和 6 年 9 月 2～4 日
発表者　　:葉　健人（大阪大学大学院工学研究科　助教）

・発表テーマと内容

タイトル　　:「Analysis of Consciousness Transformation through a Mobility Co-creation Program with High School Students Utilizing E-Bikes in Hilly and Mountainous Area」
発表形式　:ポスターセッション

(3) プロジェクトリーダー及び発表者

2321A「中山間エリアの高校における交通課題解決のための教育活動」
PL　:北村　友人（東京大学大学院教育学研究科　教授）
発表者:葉　健人（大阪大学大学院工学研究科　助教）

5. 令和 6 年度研究調査内部報告会(R07.03.01)

参加者　　:役員、評議員、顧問、会員および特別研究員 計 115 名
場所　　:対面及びオンラインでのハイブリッド開催
報告テーマ　:令和 6 年度実施の全プロジェクトテーマ

6. 研究調査部会企画委員会

(1)IATSS サロン

・第 1 回 IATSS サロン(R06.07.03)
講演タイトル:
『自動運転の実現に向けた取組みと課題～先行する米国とどう戦っていくべきか？』
講演者:葛巻　清吾
出席者:15 人(対面開催)

・第 2 回 IATSS サロン(R07.02.25)
講演タイトル:『モータージャーナリスト 竹岡 圭(会員)をお招きして』
話題提供者:竹岡 圭(モータージャーナリスト 人力舎)
出席者:13 人(対面開催)

・第1回 IATSS サロン(視察)(R06.07.22-23)
視察先:山形県飯豊町豪雨災害被災現場、電動モビリティーシステム専門職大学、
バイオガス発電所
出席者:会員 6 名

(2)委員会開催実績

第 1 回委員会(R06.05.15)
・昨年度委員会レビュー
・年間スケジュール共有
・課題検討

第 2 回委員会(R06.07.04)
・内報実施方法検討
・プロジェクト審査方法検討、プロジェクト提案書改定について
・ビヨンド50ビジョンに基づく研究調査方向性検討

第 3 回委員会(R06.10.17)
・ATRANS 研究カテゴリー(傘)について
・研究調査プロジェクト一次審査方法、プロジェクト提案書改定について(カテゴリー途中変更)
・IATSS ビジョン 2024 会長発信対応
・内報、外報実施方法

・IATSS サロンについて
・年次交流会の参加代行について
・フォーラム連携プロジェクト関連提案

第 4 回委員会(R06.11.13)
・プロジェクト提案書一次選考基準、提案書内容の変更、案内方法について
・プロジェクト種別(カテゴリー)途中変更について

第 5 回委員会(PL 会議)(R07.03.03)
・2025 年度プロジェクトの一次選考＋仮予算決定
・外報発表プロジェクト選考
・国際発表プロジェクト候補選考

(3)その他の活動
・研究調査プロジェクト提案書作成ガイダンス実施(R06.10.21)
説明者:鈴木委員、堀口委員
ガイダンス対象:4名--小嶋文 会員、大木 聖子 会員、柴山 多佳児 会員、中井 宏 会員

(4)研究調査部会企画委員会メンバー(敬称略)
委員長 一ノ瀬 友博 (IATSS 会員/慶應義塾大学 環境情報学部 学部長・教授)
委員: 鈴木 弘司 (IATSS 会員/名古屋工業大学 社会工学科 教授)
関根 太郎 (IATSS 会員/日本大学 理工学部 機械工学科 教授)
高橋 正也 (IATSS 会員/(独)労働者健康安全機構 労働安全衛生総合研究所 センター長)
堀口 良太 (IATSS 会員/㈱アイ・トランスポート・ラボ代表取締役)
吉田 長裕 (IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科 准教授)

II 広報出版事業

定期刊行物としては、IATSS Review(国際交通安全学会誌)Vol.49, No.1～3 および IATSS Research(英文論文集)Vol.48, Issue 1～4 を発行した。

1. 広報出版部会 学会誌編集委員会

(1)IATSS Review の発行

・Vol.49, No.1「特集/国際交通安全学会創立五十周年」(R06.06.30)
・Vol.49, No.2「特集/タクシー・ライドシェア」(R06.10.31)
・Vol.49, No.3「特集/働くクルマと社会」(R07.02.28)

(2)投稿原稿区分の新設に関する検討

前年度からの継続審議として、投稿原稿区分に「二次出版」(他誌掲載論文の翻訳版掲載)区分を設ける方向で、投稿規定の改訂や査読方法等を含め詳細の検討を重ねてきたが、二次出版原稿は受け付けないことに決定した。

(3)委員会開催実績

第 1 回(第 356 回)(R06.04.03)
・Vol.48, No.3 発行報告
・Vol.49, No.1 進捗確認、寄稿確認報告および審議
・Vol.49, No.2 進捗確認
・Vol.49, No.3 特集企画検討
・投稿 23-01、23-02、23-03 審査の進捗確認
・投稿 23-04、23-05 査読者選定
・二次出版に関する検討(投稿規定改訂)
・J-STAGE アクセス集計報告

第 2 回(第 357 回)(R06.06.06)
・Vol.49, No.1 進捗確認
・Vol.49, No.2 進捗確認
・Vol.49, No.3 特集企画検討
・Vol.50, No.1 特集企画検討
・投稿 23-03、23-04、23-05 査読報告および審議
・投稿 24-01 査読者選定
・二次出版に関する検討(投稿規定改訂)
・J-STAGE アクセス集計報告

第 3 回(第 358 回)(R06.07.09)
・Vol.49, No.1 発行報告
・Vol.49, No.2 原稿確認報告および審議
・Vol.49, No.3 特集企画検討

・Vol.50, No.1 以降の特集企画検討
・投稿 23-03、23-04、23-05、24-01 審査の進捗確認
・投稿 24-02 査読者選定
・二次出版に関する検討(投稿規定改訂、査読方法)
・J-STAGE アクセス集計報告

第 4 回(第 359 回)(R06.08.19)
・Vol.49, No.2 進捗確認
・Vol.49, No.3 進捗確認
・Vol.50, No.1 特集企画検討
・投稿 23-01、23-02、23-03、23-04、23-05 審査の進捗確認
・投稿 24-01、24-02 査読報告および審議
・二次出版に関する検討(査読方法、投稿規定改訂)
・Vol.50, No.2 以降の特集企画検討
・J-STAGE アクセス集計報告

第 5 回(第 360 回)(R06.10.08)
・Vol.49, No.2 進捗確認
・Vol.49, No.3 進捗確認
・Vol.50, No.1 特集企画検討
・Vol.50, No.2 特集企画検討
・投稿 23-03、24-01、24-02 審査の進捗確認
・投稿 24-03 査読者選定
・二次出版に関する検討(査読方法、最終議論)
・J-STAGE アクセス集計報告

第 6 回(第 361 回)(R06.11.15)
・Vol.49, No.2 発行報告
・Vol.49, No.3 原稿確認報告および審議
・Vol.50, No.1 進捗確認
・Vol.50, No.2 特集企画検討
・投稿 23-03、24-02、24-03 審査の進捗確認
・投稿 24-03 査読者決定
・二次出版に関する検討(企画調整委員会への報告内容)

第 7 回(第 362 回)(R07.01.29)
・Vol.49, No.3 進捗確認
・Vol.50, No.1 進捗確認、論文査読者選定
・Vol.50, No.2 特集企画検討
・Vol.50, No.3 特集企画検討
・投稿 23-03、24-02、24-03 審査の進捗確認

・二次出版に関する検討(企画調整委員会での決定事項の報告)
・J-STAGE アクセス集計報告

第 8 回(第 363 回)(R07.03.19)
・Vol.49, No.3 発行報告
・Vol.50, No.1 原稿確認報告および審議
・Vol.50, No.2 進捗確認
・Vol.50, No.3 特集企画検討
・投稿 23-03、24-03 審査の進捗確認
・J-STAGE アクセス集計報告
・次期委員会の引き継ぎ事項について

(4)学会誌編集委員会メンバー(敬称略)

委員長　二村　真理子 (IATSS 会員/東京女子大学現代教養学部国際社会学科　教授)
木林　和彦　(IATSS 会員/東京女子医科大学医学部法医学講座　教授)
栗谷川　幸代 (IATSS 会員/日本大学生産工学部　教授)
塩見　康博　(IATSS 会員/立命館大学理工学部　教授)
小竹　元基　(IATSS 会員/東京科学大学工学院機械系　教授)
杉本　洋一　(IATSS 会員/(株)本田技術研究所先進技術研究所　フェロー)
鈴木　弘司　(IATSS 会員/名古屋工業大学社会工学科　教授)
中尾田　隆　(IATSS 会員/池袋南法律事務所　弁護士)
浜岡　秀勝　(IATSS 会員/秋田大学大学院理工学研究科　教授)
村上　暁信　(IATSS 会員/筑波大学システム情報系　教授)

2. 広報出版部会　英文論文集編集委員会

(1)インパクトファクター継続取得

令和 6 年 6 月 20 日、令和 5 年 Journal Impact Factor (JIF) が Clarivate Analytics 社より発表され、IATSS Research が昨年に続き JIF ″3.2″を取得した。

(2)定期発行

下記の通り、4 号を定期発行した。
・Vol.48, Issue 1(R06.04)
・Vol.48, Issue 2(R06.07)
・Vol.48, Issue 3(R06.10)
・Vol.48, Issue 4(R06.12)

下記特集を特集サイトにて発行した。
・“History and Social Impact of IATSS Research Projects”(R06.12)

(3)次年度の発行計画および特集企画

・Vol.49, Issue 1(R07.04 予定)

・Vol.49, Issue 2(R07.07 予定)
・Vol.49, Issue 3(R07.10 予定)
・Vol.49, Issue 4(R07.12 予定)
・“The ESRA initiative: growing insights on global monitoring of road safety performance and attitudes”特集
・“ICSC Exploring Cycling Safety Culture”特集
・“Sensing and Communication Technology and Application for Transportation”特集

(4)ジャーナルパフォーマンスの確認

定期的に編集委員会にて投稿数、登載率、被引用率等のジャーナルパフォーマンスの推移を確認した。

(5)査読スピードの改善

査読期間の長い論文は、サポートレビューアーに短期間での査読を依頼し、査読期間の短縮を図った。

(6)スコープの見直し

他の交通系ジャーナルとの差別化を図ることを目的に、スコープの見直しを行う必要性について検討を開始した。

(7)MEDLINE の申請検討

IATSS Research に掲載された医学系論文の割合を確認し、エルゼビアを通じて MEDLINE への申請を検討した。

(8)功労賞の表彰

長年 IATSS に貢献されてきた Advisory board の方々を恒常的な制度として報いることを趣旨とし、功労賞制度を導入した。初年度は、IATSS 創立 50 周年の記念式典に Advisory board 4 名に招待状を送付し、3 名を招聘、1 名は自宅を訪問し表彰した。

(9)アドバイザリー会議の開催

創立 50 周年記念式典での功労賞表彰の前日にアドバイザリー会議を開催した。編集委員会よりジャーナルパフォーマンス報告および IATSS Research の歴史、概要について説明を行い、エルゼビアより出版業界のトレンド報告後、Advisory board よりジャーナル運営についてご意見をいただいた。

(10)委員会開催実績

第 1 回(197 回)編集委員会(R06.05.08)
・今年度の編集体制
・ジャーナルパフォーマンス報告
・48-1 発刊報告
・創立 50 周年特集進捗報告
・ESRA 特集進捗報告
・ICSC 特集進捗報告

・功労賞およびアドバイザリー会議について
・MEDLINE 申請について
・二重投稿への対応について
・プロモーション用アイテムについて
・投稿論文審査進捗報告

第 2 回(198 回)編集委員会(R06.07.23)
・ジャーナルパフォーマンス報告
・48-2 発刊報告
・創立 50 周年記念特集進捗報告
・ESRA 特集進捗報告
・ICSC 特集進捗報告
・功労賞表彰について
・アドバイザリー会議について
・投稿論文審査進捗報告

第 3 回(199 回)編集委員会(R06.11.13)
・ジャーナルパフォーマンス報告
・48-3 発刊報告
・創立 50 周年記念特集進捗報告
・ESRA 特集進捗報告
・ICSC 特集進捗報告
・Sensing 特集企画検討
・Scope の検討(IATSS Research の差別化)
・MEDLINE への申請について
・即時 OA 義務化の対応検討
・投稿論文審査進捗報告

第 4 回(200 回)編集委員会(R07.02.12)
・ジャーナルパフォーマンス報告
・48-4 発刊報告
・ESRA 特集進捗報告
・ICSC 特集進捗報告
・Sensing 特集進捗報告
・SHIFT 特集企画検討
・エディター更新および増員の検討
・Scope の検討(IATSS Research の差別化)
・MEDLINE への申請について
・投稿論文審査進捗報告

(11)英文論文集編集委員会メンバー(敬称略)

委員長　上條　俊介　(IATSS 会員/東京大学情報学環　准教授)
紀伊　雅敦　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
木林　和彦　(IATSS 会員/東京女子医科大学医学部法医学講座　教授)
小嶋　文　(IATSS 会員/埼玉大学大学院理工学研究科　准教授)
小早川　悟　(IATSS 会員/日本大学理工学部交通システム工学科　教授)
土井　健司　(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科　教授)
大森　宣暁　(IATSS 会員/宇都宮大学地域デザイン科学部　教授)
後藤　孝夫　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)
福山　敬　(IATSS 会員/鳥取大学工学部社会システム土木系学科　教授)

(12)英文論文集編集委員会メンバーを除く Editorial Board Members(敬称略)

●Associate Editors (36 名)

B. Barabino (University of Brescia, Italy)
J. -M. Burkhardt (Gustave Eiffel University, France)
S. Chalermpong (Chulalongkorn University, Thailand)
Y.-S. Chung (National Chiao Tung University, Taiwan)
A. M. Fillone (De La Salle University, the Philippines)
V. M. Garikapati (National Renewable Energy Laboratory, USA)
Y. Gu (Hiroshima University, Japan)
S. Han (Seoul National University, Republic of Korea)
P. Hancock (University of Central Florida, USA)
N. Hashimoto (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, Japan)
D. O. Hernandez (University College London, UK)
YT. Hsu (National Taiwan University, Taiwan)
H. Inoi (University of Toyama, Japan)
G. INTURRI (University of Catania, Italy)
S. Jaensirisak (Ubon Ratchathani University, Thailand)
D. Jain (Indian Institute of Technology, India)
E. Javanmardi (The University of Tokyo, Japan)
S. Le Vine (State University of New York at New Paltz, USA & Imperial College London, UK)
L. Malik (Indian Institute of Technology Dhanbad, India)
T. Manabe (Saitama University, Japan)
I. M.-Babiano (University of Melbourne, Australia)
M. Matsuo (Kobe University, Japan)
T. Osada (Utsunomiya University, Japan)
E. Papadimitriou (Delft University of Technology, the Netherlands)
A. WH Poi (Malaysian Institute of Road Safety Research, Malaysia)
S. S. Pulugurtha (The University of North Carolina at Charlotte, USA)
N. Saunier (Polytechnique Montreal, Canada)
N.N. Sze (Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, China)

R. Tay (RMIT University, Australia)
M. Tira (University of Brescia, Italy)
M. Vanderschuren (University of Cape Town, South Africa)
V. Vichiensan (Kasetsart University, Thailand)
K. Yoh (Osaka University, Japan)
K. Yoshioka (Nihon University, Japan)
C. Watling (University of Southern Queensland, Australia)
K.-F. Wu (National Chiao Tung University, Taiwan)

●Editorial Advisory Board Members (11 名)

N. Christie (University College London, UK)
M. Hagenzieker (Delft University of Technology, the Netherlands)
B. Heydecker (University College London, UK)
B. E. Horn (World Road Safety Institute, France)
P. Jones (University College London, UK)
G. M. Mackay (University of Birmingham, UK)
R. M. Pendyala (Arizona State University, USA)
M. Tira (University of Brescia, Italy)
G. Tiwari (Indian Institute of Technology Delhi, India)
F. Wegman (Delft University of Technology, the Netherlands)
S. V. Wong (Malaysian Institute of Road Safety Research & University Putra Malaysia, Malaysia)

III 褒賞事業

今年度は、第 45 回国際交通安全学会賞の贈呈式を行うとともに、第 46 回国際交通安全学会賞として、業績部門 2 件、著作部門 2 件、論文部門 1 件の授賞を決定した。

1. 第 45 回(2023 年度)国際交通安全学会賞贈呈式

令和 6 年 4 月 12 日(金) ハイブリッド(経団連会館＋リモート)で開催した。

2. 第 46 回(2024 年度)国際交通安全学会賞

≪業績部門≫

当部門は、理想的な交通社会の実現に関して、研究、施策の推進、普及、啓発、あるいは機器の開発、設備・施設の建設などに多大な業績をあげたものを対象に、過去 3 年以内に成果が顕著となった業績の中から選考される。

例年同様、公募による推薦と委員会メンバーの調査によって、候補業績の情報を収集し、今年度の候補業績 10 件について視察・ヒアリング調査及び審査を重ねた結果、2 件が選出された。

出典:第 46 回国際交通安全学会賞パンフレット

業績題目 ： シェアサイクルで街をささえ人がそだつ ～札幌市での自転車文化の鼓動～

受賞者 ： 特定非営利活動法人 ポロクル

受賞理由 ：

ポロクルは、シェアサイクル関連事業が地域に根付くよう、自治体等と連携し展開することで、札幌市における交通まちづくり・ひとづくりに貢献しています。

主軸のシェアサイクル事業は着実に拡大しており、現在、電動アシスト機能付自転車約 600 台ポート約 60 カ所で稼働しています。現場運営は、NPO 法人 ezorock と連携し所属する学生を中心とした若者達「ポロクルクルー」が担い、1 日約 220 台の車両の再配置等の作業を行っています。ICT 活用によるサービスの向上にも積極的に取り組んでおり、全車両への GPS の搭載、シェアサイクルシステムや専用アプリの改善、国内初の複合経路探索システム「mixway」の開発連携のほか、データの学術研究への活用などにも取り組んでいます。

街頭呼びかけなど、交通安全・環境保全に関する啓発活動も積極的に実施しています。日々のクルーの活動自体が啓発活動だという認識のもと、清掃活動や模範走行(走行時のハンドサインなど)を地道に実践しています。

さらに、災害復旧時の自転車の無償提供など防災まちづくりへの貢献のほか、札幌市が水素社会を目指す中で、水素燃料電池を搭載した搭載アシスト自転車の独自開発にも取り組んでおり、地域の自転車文化の醸成に寄与しています。

このような多様な活動により、ポロクルの利用件数は、2018 年度の約 11 万回(会員登録 1.5 万件)から、2024 年度には約 51 万回(会員登録数約 9 万件)へと大幅に増加しています。

冬季は積雪のため休業するという厳しい環境のなかで、様々なシェアサイクル関連事業を通じて地域の交通システムとして成長していくプロセスは、今後、地域交通に関する一連のまちづくり活動が、地方のまちと人を支えはぐくむ社会システムへと昇華していく好例であり、国際交通

安全学会が目指す理想的な交通社会の実現に寄与する事業として高く評価いたしました。

業績題目 ： 官民共創と地方創生テレワークが最先端の地域モビリティを実現する
受賞者　 ： 塩尻市
受賞理由 ：

塩尻市では、交通 DX として 20 社以上からなる産学官民の共創体制が構築されています。この体制のもと、2020 年より自動運転バスの実証を始めています。インフラ連携の開始などを踏まえ、2024 年度には自動運転車両の認可および特定自動運行の許可が得られ、自動運転レベル 4 の社会実装が可能となっています。使用するバスの 35km/h 走行を可能とするため、道路空間・環境の変化等による非常時への対応など、多くの調査確認事項が必要となりますが、限られた人数の自治体職員でそれらを解決したのは特筆すべき特長です。

加えて、公共交通の取り組み（MaaS）として、AI 活用型オンデマンドバスも運行しています。2020 年の運行開始から 5 年間で延べ 13 万人以上の利用があり、オンデマンドバスの運行により、市民の潜在需要が明らかになっています。今後は、このニーズをふまえ、再び定期運行バスへ戻す路線があるかもしれません。

これら交通サービスにおいて、それらを支える KADO は塩尻市における斬新な取り組みです。KADO は自営型テレワークシステムの呼称であり、2010 年に開始されてから現在までに約 800 名の登録があります。先述した自動運転に必須な 3 次元地図は KADO を通じて作成されました。また、AI 活用型オンデマンドバスの運行では、予約時のオペレーターを KADO のメンバーが従事しています。こうした KADO の取り組みは、多くの地方都市にも適用でき、これからの自治体運営において大きな変革をもたらすと思われます。

このような塩尻市における様々な施策は、先駆的でかつ他の地方都市のモデルとなり得る取り組みであると高く評価いたしました。

≪著作部門≫

当部門は、理想的な交通社会の実現に関して、過去 2 年間に初版として刊行された優れた著作・出版物の中から選考される。

今年度は 36 点について各委員が分担で査読をし、絞り込みを行い審査した結果、2 件が選出された。

出典：第 46 回国際交通安全学会賞パンフレット

著書名　 ： 街歩きと都市の様相　 空間体験の全体性を読み解く
受賞者　 ： 北　雄介
受賞理由 ：

街歩きの楽しさ、街の雰囲気等を全体的・総合的に捉えるべく、歩いて言葉を記すということを軸に、設計学・認知科学などの「理論・方法」、「実験」、「実装」の三層で展開した著者の研究をまとめた書籍です。街歩きは、防災、景観等のまちづくりのツールとして行われていますが、ともすれば参加者が感想を言い合うだけのイベントとなっており、それを整理するための理論は確立していません。実務においては、街歩きの結果についての参加者の感想が、専門家の経験を通して情報の構造化がなされており、方法論としてはアートの領域となっています。

本書では、ウォーカブルの概念を様相論の観点から実証することを試みており、学術的な課

題に挑戦しています。具体的には、身体的に感じ取られる都市を、様相論に基づき記述・解釈する筆者の理論をまず整理し、実践研究をまとめています。計量されるデータの分析に基づく従来の科学的アプローチとは異なる新たな都市理解の方法論を構築しようとしています。提案する手法を方法論として確立するためには、さらなる研究や実践が必要と考えられますが、街歩き以外の交通・都市の多分野へ展開可能な将来性のある業績と考えられます。

本書は、街歩きから都市の様相を捉えるプロセスを定型化し、誰でも実践できるように整理しています。従来はアートの領域であった街歩きを再現可能な科学の領域で再構成しようとする試みは、学術的価値が高く、将来の発展が期待されることを高く評価いたしました。

著書名　：　世界に学ぶ自転車都市のつくりかた
受賞者　：　宮田　浩介，小畑　和香子，南村　多津恵，早川　洋平
受賞理由：

本書は、自転車を基軸とした都市づくりを実現するための実践的な方策を示した著作です。

著者たちは、日本が自転車の交通分担率の高い自転車利用大国であるものの、持続可能な社会の実現には自転車利用を更に促進する必要があり、そのためには利用者視点に立ったインフラ整備が重要であると主張しています。

本書では、コペンハーゲン、オランダ、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ドイツといった欧米の先進・新興自転車都市や、国内地方部の自転車まちづくりの実例を、豊富な写真、グラフ、図解等を用いて紹介しています。また、各都市の単なる紹介にとどまらず、「ニーズ」、「デザイン」、「都市戦略」といった 3 つの観点から整理し、自転車中心の都市づくりにおける成功要因や課題を立体的に把握し、都市計画等の実務に直結する知見を提供しています。さらに、日本が自転車の交通分担率の高い自転車利用大国であるものの、それが自転車の移動に適したコンパクトな生活圏の副産物にすぎないことを指摘し、自転車インフラの整備では立ち遅れている現状を具体的に明らかにした上で、「静穏化された生活道路と世界基準の自転車道」の整備という方策を提案しています。加えて、デザインの原則から具体的な設計の詳細を示し、研究者、政策担当者、市民といった幅広い読者層に役立つ知見を提供していることなどを高く評価し、本書を国際交通安全学会賞著作部門に相応しいと判断いたしました。

≪論文部門≫

当部門は、国際交通安全学会誌(IATSS Review)及び英文論文集(IATSS RESEARCH)に掲載された論文の中から選考される。

本年度は、「IATSS Review」Vol.48,No2・Vol.48,No3・Vol.49,No1 に掲載された論文・論説 4 編および「IATSS RESEARCH」Vol.47,Issue3・Vol.47,Issue4・Vol.48,Issue1・Vol.48,Issue2 に掲載された論文 40 編について各委員が分担で査読をし、絞り込みを行い審査した結果、1 編が選出された。

出典：第 46 回国際交通安全学会賞パンフレット

論文名　：　Analysis of primary-party traffic accident rates per driver in Japan from 1995 to 2015:　Do older drivers cause more accidents?
受賞者　：　Kyoungmin Kim,　Keisuke Matsuhashi,　Masahiro Ishikawa
受賞理由：

現在、日本の交通事故件数は減少傾向にあるものの、高齢化の進展への適切な対処など、時代のニーズに応える交通安全の取り組みが求められています。そのような状況の中で、本研究は日本の交通事故データを免許保有者当たりの事故件数に基づいた事故率を調査するだけでなく、年齢別の時系列事故データを分析することで、当時の交通安全教育や交通安全政策と関連する要因と時代効果についても明らかにすることを試みています。

分析に当たっては、疫学や医学で用いられる BAPC（Bayesian age-period-cohort）分析を援用した新しい視点での交通事故分析に関する研究を行っています。交通事故の事故率に着目した分析では、実際に運転しているドライバー数をもとに評価を行っており、高齢者は運転者数あたりの複数車事故は多いとはいえず、一方で単独車事故が有意に多いことが示されています。さらに、男性と女性ともに加齢に伴い（男性 80 歳以上、女性 70 歳以上）、事故率が有意に高くなり、運動能力や判断ミスに起因する、相手を巻き込まない事故が起きやすくなることを示しています。また、期間の効果に関する分析では、基本的な交通安全プログラムや電子車両制御システム等の普及の時期により、交通事故の発生傾向が異なることを示しています。

本研究は、1)疫学や医学で用いられる年齢効果、期間効果、コーホート効果をベイズ推定で識別する方法を援用したこと、2)免許保有者数から日常的に運転をしていない人数を除外して分析する必要性を明示したこと、3)運転者数あたりの単独車事故が有意に多い高齢者の年齢層を詳しく分析したことなど、今後の交通事故データの分析に関して新しい視点を示していることを高く評価いたしました。

3. 2024 年度褒賞助成部会企画委員会

(1)委員会開催実績

第 1 回委員会(R06.08.23)

・第 45 回学会賞贈呈式開催報告
・年間活動スケジュールについて
・「業績部門」「著作部門」の募集と、各部門の選考方法について
・「業績部門」候補の検討
・「著作部門」査読の割り振り
・「論文部門」査読の割り振り
・ユース助成制度について

第 2 回委員会(R06.10.24)

・「業績部門」候補の検討
・「著作部門」審査および査読の割り振り
・「論文部門」審査
・ユース助成制度について
・視察・ヒアリング日程について

第 3 回委員会(R06.12.05)

・「業績部門」候補の検討
・「著作部門」審査

・「論文部門」審査
・ユース助成制度について

第 4 回委員会(R07.01.10)
・「業績部門」候補、推薦文担当決定
・「著作部門」候補、推薦文担当決定
・「論文部門」候補、推薦文担当決定
・ユース助成制度について

(2)ヒアリング・視察
・特定非営利活動法人 ポロクル 視察・ヒアリング(R06.10.18)
・塩尻市視察・ヒアリング(R06.11.15)

(3)会員信任投票
候補信任(R07.02.12 締切)

(4)理事会
候補承認(R07.02.27)

(5)褒賞助成部会企画委員会メンバー(敬称略)

委員長	小川 和久	(IATSS 会員/東北工業大学総合教育センター 教授)
	加藤 一誠	(IATSS 会員/慶應義塾大学商学部 教授)
	紀伊 雅敦	(IATSS 会員/大阪大学大学院工学研究科 教授)
	小早川 悟	(IATSS 会員/日本大学理工学部交通システム工学科 教授)
	斎藤 誠	(IATSS 会員/東京大学大学院法学政治学研究科 教授)
	関根 太郎	(IATSS 会員/日本大学理工学部機械工学科 教授)
	中川 由賀	(IATSS 会員/中京大学法学部 教授)
	浜岡 秀勝	(IATSS 会員/秋田大学大学院理工学研究科 教授)
	福山 敬	(IATSS 会員/鳥取大学工学部社会システム土木系学科 教授)
	松橋 啓介	(IATSS 会員/(国研)国立環境研究所社会システム領域 室長)

4. ユース活動助成金制度

創立 50 周年を機に「私たちがつくる交通安全～ユース活動助成金制度～」を開始した。
ユース活動助成金制度は、学校現場での交通安全教育、若者の主体的な交通安全の活動を賞賛し、その活動の継続や発展を支援すること、またこのような活動を広く周知し、普及を促進することを目的とし、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校等で行われる交通安全教育活動を対象としている。
今年度は、9件の応募があり、小学校2校、特別支援学校1校、高等学校2校の計5件に対して助成することを決定した。

(1)助成対象校と内容

①高知県土佐市立蓮池小学校

事故防止の為の正しい横断歩道の渡り方の指導や、自転車ヘルメット着用率向上を目的に、看板ポールの設置、実践事例視察などが計画されている。

②埼玉県川口市立並木小学校

児童の交通安全意識の向上と家庭・地域との連携を目的に、地域安全マップの作成、交通安全教室の実施による意識向上などが計画されている。

③熊本県立矢部高等学校二輪車競技部

交通安全意識と原付通学による安全運転技術の向上を図る事を目的に、県交通安全協会主催の「原付バイク安全運転スキルアップ講習会」への参加などが計画されている。

④福岡県立北九州視覚特別支援学校

視覚障がい者が安心して生活や通学できる環境作りを目的に、視覚障がいについての基礎知識の提供のためのチラシ作成など、事故防止の向上につなげる活動が計画されている。

⑤静岡県加藤学園高等学校

登下校時危険個所の交通安全向上などを目的に、全クラスの交通委員による交通安全指導の実施、月一回の自転車マナーの、一斉指導の実施などが計画されている。

(2)令和 6 年度褒賞助成部会 ユース助成タスクフォース会議開催実績

第 1 回会議(R06.05.23)

・内閣府への申請状況を共有
・審査基準、申請書の検討

第 2 回会議(R06.07.26)

・内閣府への申請状況を共有
・募集要項、選考基準書、助成実績報告書、経費精算報告書、ホームページ掲載内容の検討

第 3 回会議(R06.09.02)

・8 月7日に内閣府に認定されたことを報告
・助成金申請書、助成金申請書の記入例、ユース助成実績報告書、経費精算報告書、ホームページ掲載内容の検討
・全国の教育委員会に配布するチラシの内容確認

第 4 回会議(R07.02.21)

・助成対象校の選定
・推薦文執筆者を決定
・ホームページ掲載内容の確定

Ⅳ IATSS フォーラム事業

国際交流も踏まえた研修事業として、1985 年 9 月から運営を開始し、アジア諸国の若い有望な人材を日本に招請し、各参加国での持続可能な社会の実現に寄与する人材の育成を進めている。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)による 3 年間の中断後、昨年度には短縮した日程で研修を再開していたが、COVID-19 の 5 類感染症への移行に伴い、今年度よりコロナ中断前と同様の 57 日間に渡り実施した。
また昨年度から取り組んでいる、IATSS 本体に豊富にある学術的・国際的リソースを更に活用し、交通・モビリティ系のテーマを題材とした新研修コンテンツを導入し、アジア 10 カ国計 40 名の研修生が令和 6 年度の 2 回の研修に参加した。

事業各項目の内容は以下のとおりである。

(1)IATSS フォーラム研修実施

コロナ禍にあった令和 5 年度の研修は 35 日の短縮版であったが、令和 6 年度はコロナ禍前同様 57 日間の日程で春・秋 2 回の研修を実施した。

春研修：令和 6 年 5 月 20 日～7 月 15 日
秋研修：令和 6 年 9 月 16 日～11 月 11 日

(2)新研修コンテンツ導入

従来からの研修目的である、アジア地域の持続可能な発展に寄与する若手リーダーの育成は変更せず、「モビリティを通じた Well-being の向上」をテーマとした新研修プログラムを全域で導入した。その一環として、宇都宮フィールドスタディーを導入し、超高齢化社会や環境問題への対応を踏まえたネットワーク型コンパクトシティ(NCC)の構築への取り組みや、次世代型路面電車(LRT)を基盤としたまちづくりについて、LRT 導入に深くかかわった IATSS 会員から直接学べるプログラムとし、研修生から好評を得た。

(3)IATSS フォーラム部会 IATSS フォーラム実行委員会開催実績

令和 6 年度は、6 回の実行委員会を開催した。

第 163 回実行委員会(R06.04.19)
- 令和 6 年度新研修コンテンツ開発状況の共有
- 令和 6 年度新研修コンテンツへ日程共有と実行委員の参加可能日の確認
- 令和 7 年度研修生の最終審査日程について調査
- グループ研究発表までのプロセスについて了承

第 164 回実行委員会(R06.08.23)
- 来期の創立 40 周年記念事業の進捗共有
- 令和 6 年度春研修の振り返りと秋研修に向けての取り組みついて共有

第 165 回実行委員会(R06.09.21)
・同窓会プロジェクトの承認
・創立 40 周年記念事業の骨子了承

第 166 回実行委員会(R06.11.09)
・令和 7 年度研修生の最終審査の情報共有
・創立 40 周年記念事業の推進体制了承

第 167 回実行委員会(R07.01.30)
・同窓会プロジェクトの承認
・令和 7 年度研修編成について確認
・創立 40 周年記念事業の進捗共有

第 168 回実行委員会(R07.03.28)
・同窓会プロジェクトの承認依頼
・令和 7 年度研修編成の進捗共有
・創立 40 周年記念事業内容検討

(4) IATSS フォーラム実行委員会メンバー(敬称略)

委員長　北村　友人　(IATSS 会員/東京大学大学院教育学研究科　教授)
川口　純　(IATSS 会員/慶應義塾大学人文社会学系　准教授)
中村　彰宏　(IATSS 会員/中央大学経済学部　教授)
平岡　敏洋　(IATSS 会員/(一財)日本自動車研究所　主席研究員)

IATSS フォーラム部会特別委員
芦田　明美　(名古屋大学大学院国際開発研究科　准教授)
葉　健人　(大阪大学大学院工学研究科　助教)

(5)現地委員会

例年、現地委員会主導で IATSS フォーラム研修生選抜のための書類審査/面接審査を実施している。令和 6 年度は、7 月から 9 月までに募集期間を変更し、現地委員会による書類選考を経て、令和 6 年 11 月から 12 月に IATSS フォーラム実行委員も現地での面接に参加し、令和 7 年度研修参加者 10 カ国 40 名の選抜を完了した。

①IATSS フォーラム　インド委員会
委員長　Geetam Tiwari　(インド工科大学デリー校教授)
事務局　LEAD India

②IATSS フォーラム　インドネシア委員会
委員長　Abdi Hamdani　(Advisor, ABC Vision Capital)
事務局　アストラホンダモーター財団

③IATSS フォーラム カンボジア委員会
委員長　Oum Ravy　（王立プノンペン大学　副学長）
事務局　Cambodia-Japan Cooperation Center (CJCC)

④IATSS フォーラム シンガポール委員会
委員長　George Abraham　（GA グループ Ltd. 会長兼代表取締役）
事務局　The National University of Singapore Society (NUSS)

⑤IATSS フォーラム タイ委員会
委員長　Phirun Saiyasitpanich　（タイ環境省気候変動環境局 長官）
事務局　タイ環境省気候変動環境局（DCCE）

⑥IATSS フォーラム フィリピン委員会
委員長　Maridon Onda Sahagun　（フィリピン科学技術省 事務次官）
事務局　フィリピン科学技術省（DOST）

⑦IATSS フォーラム ベトナム委員会
委員長　Vo Dai Luoc　（ベトナムアジア太平洋経済センター会長）
事務局　ベトナムアジア太平洋経済センター（VAPEC）

⑧IATSS フォーラム マレーシア委員会
委員長　Dato’Zuraidah Atan　（ズライダーアタン弁護士事務所代表）
事務局　マラヤ大学

⑨IATSS フォーラム ミャンマー委員会
委員長　Zaw Min Win　（ミャンマー産業協会　シニアアドバイザー）
事務局　ミャンマー産業協会（MIA）

⑩IATSS フォーラム ラオス委員会
委員長　Vanhpheng Khounbolay　（ラオス青年同盟 職業訓練局副局長）
事務局　ラオス青年同盟

Ⅴ 国際交流事業

1. 国際フォーラム実行委員会

(1)第 10 回 GIFTS 開催概要(敬称略)

テーマ　　:「理想的な社会に向けた交通文化」
日時　　:令和 6 年 12 月 7 日(土) 09:30-17:10
場所　　:東京コンベンションホール
開催形式　:ハイブリッド(会場参加・リモート参加)
開会挨拶　:武内 和彦(IATSS 会長)
趣旨説明　:中村 彰宏(IATSS 会員/GIFTS 実行委員長)
基調講演　:ニコラ・クリスティ(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン交通研究センター
交通・安全学教授/IATSS 海外フェロー)
クラウディア・アドリアゾーラ ステイル(世界資源研究所(WRI)グローバル都市モビリティ副ディレクター/グローバル健康・交通安全プログラム ディレクター)

パネルディスカッション :
司会: 中村 英樹 (IATSS 会員)
パネリスト:
スザンナ・ザマタロ(国際道路連盟(IRF)最高責任者)
ヴァウター・ヴァン・デン・ベルジェ(ティルコン・リサーチ＆コンサルティング ディレクター)
ガッサーン・アブ レブデ(ウェストバージニア州ハンティントン、マーシャル大学 准教授)
鳥海 梓(東京大学 生産技術研究所 助教)

ワークショップ :
司会: 森本 章倫 (IATSS 会員)
パネリスト:
クラウディア・アドリアゾーラ ステイル
マイケル・アニャラ(アジア開発銀行上級交通専門家(道路アセットマネジメント))
須原 靖博((独)国際協力機構(JICA) 社会基盤部 運輸交通グループ第1チーム 課長)

IATSS 創立 50 周年総括 :中村 文彦(IATSS 会員/ IATSS 創 50 戦略会議議長)
閉会挨拶　:河合 信之(IATSS 専務理事)

参加者　　:172 名(会場 76 名、リモート 96 名) YouTube Live73 名

(2)委員会開催実績

第 1 回実行委員会(R06.07.11)
・第 10 回 GIFTS ワークショップ＜国際共同社会実装展開プロジェクト＞の進め方
・第 10 回 GIFTS パネルディスカッション＜国際共同研究展開プロジェクト＞の進め方
・クラウディア氏の基調講演について

・二コラ先生の基調講演について
・テーマ名について
・趣旨文について

第 2 回実行委員会(R07.02.20)
・第 10 回GIFTSの振り返り
・GIFTS10年の振り返りと今後について

(3)IATSS 国際フォーラム(GIFTS)実行委員会メンバー(敬称略)

委員長	中村 彰宏	(IATSS 会員/中央大学経済学部 教授)
委員	大口 敬	(IATSS 会員/東京大学生産技術研究所 教授)
	中村 英樹	(IATSS 会員/名古屋大学大学院環境学研究科 教授)
	堀口 良太	(IATSS 会員/㈱アイ・トランスポート・ラボ 代表取締役)
	馬奈木俊介	(IATSS 会員/九州大学大学院工学研究院 教授)
	森本 章倫	(IATSS 会員/早稲田大学理工学術院創造理工学部社会環境工学科 教授)
	吉田 長裕	(IATSS 会員/大阪公立大学大学院工学研究科 准教授)

2. ATRANS (Asian Transportation Research Society) への業務委託

(1)業務委託

下記の5テーマの業務委託研究を実施した。

① Developing Policy Solutions and Guidelines for Designing and Implementing Urban Mobility Hubs in Bangkok
② Understanding Driver Behaviors and Traffic Conflicts for Safety Improvements at Roundabouts in Community Areas
③ Developing an Evaluation Method of Road Safety Education
④ Investigating the Impact of Roads Development on Urban Safety Through Geospatial Analysis
⑤ Investigation of Operations and Services of Small Public Transport and Paratransit to Enhance Railway Station Access

(2) 実績

・業務委託_報告会

①中間報告会 (5つの研究テーマの中間報告)
開催日 :令和 6 年 8 月 29 日
形態 :ハイブリッド開催
場所 :Chatrium Grand Hotel Bangkok (タイ_バンコク)

②Semi-Final 報告会 (5つの研究テーマの最終事前報告)
開催日 :令和 7 年 1 月 24 日
形態 :ハイブリッド開催
場所 :TKP ガーデンシティ PREMIUM 京橋 (日本_東京)

③IATSS 外部報告会（活性化_外部発信を図るため、選出された研究テーマ⑤を報告）
開催日 :令和 7 年 4 月 11 日
形態 :ハイブリッド開催
場所 :経団連ホール（日本_東京）

・カンファレンス_共催
イベント :17th ATRANS Annual Conference (Symposium)
テーマ :Transportation for a Better Life
"MANAGING TRANSPORT DECARBONIZATION"
開催日 :令和 6 年 8 月 30 日
形態 :ハイブリッド開催
場所 :Chatrium Grand Hotel Bangkok (タイ_バンコク)
共催 :・オープニングセッション_ウェルカムメッセージ（河合専務理事）
・IATSS 会員のセッション_講演（3 名）
・IATSS 展示ブース_設営

・活動支援_研究成果の質の向上を目指し、オンラインミーティングと現地視察を実施
テーマ①
オンラインミーティング
実施日 :令和 6 年 8 月 20 日
内容 :研究テーマの詳細共有と現地視察について
現地視察
実施日 :令和 6 年 10 月 1 日-2 日
内容 :Field visit_Hub 駅の視察、Discussion meeting、Policy workshop

テーマ②
オンラインミーティング
実施日 :令和 6 年 7 月 10 日
内容 :研究テーマの詳細共有と現地視察について
現地視察
実施日 :令和 6 年 8 月 28 日
内容 :Field visit_Roundabout の視察、Discussion meeting

テーマ③
オンラインミーティング
実施日 :令和 6 年 8 月 23 日
内容 :研究テーマの詳細共有と現地視察について
現地視察
実施日 :令和 6 年 12 月 17 日
内容 :Field visit_学校教育現場の視察、Discussion meeting

テーマ④
オンラインミーティング
実施日：令和 6 年 8 月 19 日
内容　：研究テーマの詳細共有と現地視察について
現地視察
実施日：令和 6 年 8 月 28 日、11 月 18 日
内容　：Field visit_Central 駅周辺の視察、Discussion meeting

テーマ⑤
オンラインミーティング
実施日：令和 6 年 7 月 3 日、9 月 25 日
内容　：研究テーマの詳細共有と現地視察について
現地視察
実施日：令和 6 年 11 月 5 日
内容　：Field visit_最寄り駅に向けた Public Transport の視察、Discussion meeting

3. ESRA3 プロジェクトへの参画

(1)研究目的と概要

平成 30 年度より当学会は「ベルギー道路交通安全研究所」“Vias institute”がとりまとめ/調整を行っている国際プロジェクト“ESRA(E-Survey of Road users’ Attitudes)”に日本の研究機関として参加している。すでに ESRA2 展開において、48 か国約 45,000 人の道路利用者を対象とした意識調査を実施し、各国の規範意識及び交通行動の客観的データが集計・分析され、交通安全施策に資する報告書を作成した。
令和 3 年度末より 3 か年計画の ESRA3 が開始となり、令和6年度(本年度)は、調査結果の取りまとめ(Thematic report の作成やReview)などの実務を展開。当学会はステアリングメンバーとして企画運営会議（現地、リモート）に参加している。

(2)実績

・ESRA3 Steering Group meeting 第 1 回(R06.04.10)
Thematic reports の草案作成および追加情報について議論・共有

・ESRA3 Steering Group meeting 第 2 回(R06.06.18)
State of play ESRA、Themetic report などについての進捗を議論・共有

・ESRA3 Steering Group meeting 第 3 回(R06.09.09)
State of IATSS jornal special issue ESRA3、Themetic report などについ進捗を議論・共有

・ESRA3 Steering Group meeting 第 4 回(R06.12.11)
Themetic report、Updates on ESRA3 dissemination などについて進捗を議論・共有

・ESRA3 Steering Group meeting 第 5 回(R07.02.26)
内部作業についての進捗共有と、ESRA3 final event、ESRA 10 years event についての情報を共有した

・Themetic report の IATSS Task 分の概要・ドラフト・ファイナルを提出
概要提出(R07.05)、ドラフト提出(R7.07)、ファイナル提出(R7.12)

・Themetic report の IATSS Review 分を確認し提出
TIF 分の Review(R7.05)、SWOV 分の Review(R7.09)

4. 海外研究機関等とのネットワークの強化

(1)目的と概要

創立 50 周年に向けた国際性強化の取り組みの一環として、従来事務局主導で進めてきたネットワーク維持・強化活動を総括。
令和 6 年度は下記ミーティングやフォーラムに参加することで、今世界で注目されている交通社会に関わる課題やキーワードなどを改めて再整理し取りまとめるとともに、ネットワークの維持・強化を行った。

(2)実績

・TRB(Transport Research Board) ANNUAL MEETING 2025 出席
(R07.01.06-08 アメリカ_ワシントン)
①トレンド調査:
現地にてミーティングに参加し、昨今の研究動向や世界のトレンド調査、交通と安全に関する課題やキーワード等の情報収集を行った。
収集した情報を今後の交通社会に関わる種となるように整理・取りまとめた。
②ネットワークの維持・拡大:
WRI や世界銀行(GRSF)との情報公交換ミーティングを実施した。
随時ネットワークを維持・拡大することで、連携(研究調査等)の可能性を継続的に模索する。

・TT(Transforming Transportation) A Global Mobility Forum 2025 出席
(R07.03.11-12 アメリカ_ワシントン)
①トレンド調査:
現地にてフォーラムに参加し、昨今の研究動向や世界のトレンド調査、交通と安全に関する課題やキーワード等の情報収集を行った。
収集した情報を今後の交通社会に関わる種となるように整理・取りまとめた。
②ネットワークの維持・拡大:
タイにおける交通事故ミクロ調査連携(研究調査等)の可能性について、WRI との情報交換ミーティングを実施した。

5. 第 12 回国際自転車安全会議(International Cycling Safety Conference : ICSC)の主催

(1)国際自転車安全会議について

国際自転車安全会議(International Cycling Safety Conference, ICSC)は、2012 年に欧米の研究者が中心となり自転車先進国オランダで開催されて以降、毎年欧米を中心に開催されていて、自転車安全の向上を目指す科学的および実践的な活動に携わる科学者、政策立案者、その他の専門家のためのフォーラムとして機能してきている。この会議は、アイデア交換や議論の機会を提供し、参加者が旧友と再会し、新たな協力者と出会う場となっている。これまでに何百もの研究者・プロジェクトが、新たな課題に取り組み、革新的な実践的解決策を提示してきた。

令和 6 年の第 12 回国際自転車安全会議は、国際交通安全学会(IATSS)の主催により、アジア初として愛媛県今治市にて開催した。

(2)開催日時・場所

・日時:令和 6 年 11 月 5 日-7 日
・場所:愛媛県今治市
・会場:今治国際ホテル・ハーバリー・地場産業振興センター

(3)参加者

21 の国・地域から、141 名が参加

(4)後援

・内閣府
・国土交通省
・警察庁
・愛媛県
・今治市
・日本交通心理学会
・日本交通工学会
・日本自転車普及協会
・自転車活用推進研究会

以上のとおりですが、令和 6 年度事業報告は本文にて事業等が詳細に説明され、したがって「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第 34 条第 3 項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」は不要につき、附属明細書は作成いたしません。

令和 7 年 3 月 31 日

公益財団法人 国際交通安全学会